

ISSN 1883-9924

甲南英文学

No.24 泰 2009

甲南英文学会



編集委員

(五十音順、*印は編集委員長)

*大森義彦 中島信夫 山崎麻由美

目次

<i>Wuthering Heights</i> ——復讐心と孤児の運命——	吉田一穂	1
モウビィ・ディックと原罪——『白鯨』における一考察	上野未央	15
書けなかった死体解剖： <i>The Adventures of Tom Sawyer</i> における Mark Twain の苦悩	和栗 了	29
Grammatical Metaphor as a Relative Scale of Nominalization Kazukuni Sado		41
About Case Assignments to <i>That</i> -Clauses Yuko Maki		53



Wuthering Heights

—復讐心と孤児の運命—

吉田 一穂

SYNOPSIS

The purpose of this paper is to show how Heathcliff's desire for revenge has an influence on his destiny and the theological meaning of it in *Wuthering Heights* (1847). Emily Brontë shows that Heathcliff's deep-seated desire for revenge has a close relation to his complex about the position as an orphan who was picked up by Mr. Earnshaw in the street of Liverpool and brought home; he is bullied and humiliated after the elder Earnshaw's death by Earnshaw's son Hindley. Heathcliff falls passionately in love with Catherine, but he leaves the house, overhearing her say that it would degrade her to marry him. Returning three years later he finds Catherine married to Edgar Linton. Heathcliff gets Hindley and his son Hareton completely in his power, brutalizing the latter in revenge for Hindley's treatment of himself. Ironically, Hareton who was served very badly by Heathcliff, gets married to Cathy who looks like Catherine. Heathcliff longs for the death that will reunite him with Catherine, but Emily Brontë suggests that he cannot see Catherine again in heaven because he continues to have the desire for revenge. Emily shows that a person can be released from a desire for revenge only by forgiving others, and that anyone could not be happy both in life and after death if he or she continued to have a desire for revenge.

1. 作品のテーマ

Wuthering Heights (1847)は、発表の当初、誤解され、低く評価されたが、後に病的なまでに強烈な情熱を複雑な構成の中で見事に描いたものとして、英文学を代表する小説と認められるようになった。

エミリー・ブロンテ(Emily Brontë, 1818-48)は、自身を取り巻く環境を作品の中に取り込んでいる。*Wuthering Heights*の舞台はヨークシャー(Yorkshire)のハワース(Haworth)であるが、ここには彼女を育てた牧師館(現在はブロンテ博物館)がある。1820年イギリス国教会の牧師パトリック・ブロンテ(Patrick Brontë)は、病身

の妻マライア(Maria)と子供たちを連れてこの教会に赴任してきたが、ヨークシャー特有の荒野を間近に見ることができる。エミリーは、姉のシャーロット(Charlotte, 1816-55)に連れられて、寄宿学校に行ったり、塾の教師になったり、ベルギーに行ったりしたが、¹ ほとんどハワースを出ることはなく、自身を取り巻く環境と想像力から作品を生み出したと考えられている。

Wuthering Heights の物語の中心は、嵐が丘の屋敷に住むアーンショー(Earnshaw)家の年代記であるが、チャールズ・パーシー・サンガー(Charles Percy Sanger)が述べているように、ヒースクリフ(Heathcliff)のキャサリン(Catherine)への情熱と彼の復讐が物語の主要テーマである(Sanger 16)。嵐が丘のアーンショー家をめぐる悲劇は、もともと孤児であるヒースクリフがアーンショー家の主人にリヴァプール(Liverpool)の街頭で拾われなければ、起こらなかったものであった。しかし、アーンショー氏が孤児を家に連れて帰ることにより、彼がアーンショー家の二人の子供に破壊的な影響を与える。ハワースにカルヴィン主義者の偏狭な偏見があったことに関し、メアリー・ロビンソン(A. Mary Robinson)は、“this very Calvinism influenced her ideas”と述べる一方で、エミリーがこういった教えをととも嫌っていたことを指摘している(Robinson 158)。またロビンソンは、“prejudiced and evangelical Haworth had prepared the woman who rejected its Hebraic dogma.”と述べ、偏見にみちた福音主義的傾向のあるハワースが潜在的な真実を見つけだすため、ヘブライ的ドグマ(ヘブライ人は人間でなく神の意志に絶対服従することを生活の根本信念とした)を拒絶するエミリーのような女性を生み出したと説明する一方で、“she nowhere shows any proper abhorrence of the fiendish and vindictive Heathcliff”と指摘している(Robinson 159)。しかし、作品を注意深く読むと、エミリーが悪魔のような復讐心を持つヒースクリフに対する嫌悪をどこにも示していないとは言い切れない。なぜならば、エミリーはネリー・ディーン(Nelly Dean)の言葉によって、ヒースクリフに対する嫌悪を表明していると考えられるからである。注目すべきことは、エミリー・ブロンテがカルヴィン主義からも福音主義からも自由なヒースクリフを描く一方で、復讐心を持つヒースクリフに対する反発を描いていることである。いわば、作品の中にエミリーの二つの心理がかい間見られると言っていいのだ。*Wuthering Heights* の主要テーマは、確かにサンガーが述べているようにヒースクリフのキャサリンへの情熱と彼の復讐であると言っているが、作品は復讐心とその影響というテーマをも内包していて、エミリーが自身の思想を作品を通して伝えていていると考えられる。しかし、現在に至るまで、復讐心とその影響、さらにその神学的意味について詳しく論述している批評家は

いないように思われる。本論文では、孤児であるヒースクリフが復讐心を持つことにより、彼自身の運命にいかなる影響を与えるかについて述べてみたい。

2. 復讐心の形成過程

エミリー・ブロンテは、ヒースクリフの復讐心をめぐる物語を語るため、二人の語り手ロックウッド(Lockwood)とネリー・ディーンを用いている。アーノルド・ケトル(Arnold Kettle)は、ロックウッドとネリー・ディーンを作品の中で最も「普通の」人物であると考え、彼らの機能を“to keep the story close to the earth, to make it believable, partly to comment on it from a common-sense point of view and thereby to reveal in part the inadequacy of such common sense”と述べているが(Kettle 30)、良識に富む観点から両者に意見を述べさせることにより、エミリーは復讐心をめぐる異常な世界を浮き上がらせている。² 嵐が丘を訪れたロックウッドは、³ ヒースクリフに対して、“He is a dark-skinned gypsy in aspect, in dress and manners a gentleman.”、“as much a gentleman as many a country squire”、“rather slovenly, perhaps, yet not looking amiss with his negligence”(3)という印象を受けているが、彼の印象、すなわち、「顔だけは、ジプシーだが、身なりや態度は紳士」は、ネリーのヒースクリフに関する説明の前ぶれとなるものである。また、ロックウッドは夢を見るが、この夢は作品のテーマを暗示している。ある礼拝堂でロックウッドは、牧師のジェイベス・ブランダラム(Jabes Branderham)の説教を聞く。ジェイベスは490もの罪を取り上げ、「71倍目のはじめ」にたどりつく。牧師の話は、新約聖書「マタイによる福音書」第18章第21-22節に基づいている。ペテロがイエスに「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たび赦さなければなりませんか。7たびまでですか」と尋ねると、イエスは、「わたしは7たびまでとは言わない。7たびを70倍にするまでにしなさい」と言う。ジェイベスの話が「71倍目のはじめ」までたどりついたとき、ロックウッドは、ジェイベスをキリスト者たるものの赦しがたい罪にふけている罪人だとして糾弾するが、逆にジェイベスにより弾劾され、会衆に襲われる。ロックウッドの夢において重要なことは、いかに人間が赦しを実践することが難しいかを暗示していることである。イエスの話の「7たびの70倍」とはたとえであり、それほど多く赦すことが大切であることを言っているわけであるが、「71倍目のはじめ」で赦せなくなる人間の姿は、人間にとって赦しを実践することがいかに難しいかを示しているのみならず、作品における復讐の連鎖を暗示していると考えられるのだ。ステイーヴィー・デイヴィース

(Stevie Davies)は、*Wuthering Heights* の語り の時間において現在が過去に先行することに注目しているが(Davies 68)、エミリー・ブロンテはロックウッドの夢を通して効果的にテーマを暗示していると言える。

ロックウッドの要請に応じ、ようやくネリーの話が始まるが、話の前ヒースクリフを説明する際、ネリーは彼を“cuckoo”(30)に譬えている。カッコウは、ほかの種の鳥の巣に自分の卵を産み、よその巣を横取りする鳥であるが、孤児であるヒースクリフもまたカッコウのように他者の家を横取りしたのであった。ヒースクリフは、リヴァプールの街角で腹をすかせ、家もないところをアーンショー一家の主人に拾われるが、息子のヒンドリーにいじめられたり、ひどい仕打ちを受けたりする。アーンショー一家の主人は、ヒンドリーがヒースクリフをいじめているのを見つけると激怒し、ヒースクリフをかわいがるが、母親が死んだころには、ヒンドリーは父親を味方というより圧制者とみなし、ヒースクリフのことを父親の愛情と自分の特権とを横領した敵だと思ひこんでしまい、怨みを深くする。ネリーは、ヒースクリフがアーンショー一家の主人の心をつかんでいることを承知していて、たったひとこと自分がこうしたいと言え、家じゅうの者がそれに従わざるを得ないことも計算済みであったと説明し、一つの例をあげる。アーンショー一家の主人は、教区の定期市で子馬を買いヒンドリーとヒースクリフに一頭ずつ与えるが、まもなく馬が脚を悪くしたのでヒースクリフはヒンドリーに馬をとりかえるように言う。とりかえなければ父親に言いつけると言ったヒースクリフに対し、ヒンドリーは分銅を投げつけて彼を倒し、次のように言う。

“Take my colt, gipsy then!” said young Earnshaw, “And I pray that he may break your neck; take him, and be damned, you beggarly interloper! and wheedle my father out of all he has—only, afterwards, show him what you are, imp of Satan—And take that, I hope he’ll kick out your brains!” (34)

ヒンドリーが子馬を与えるときに言う言葉、「ジブシー」、「乞食根性の侵入者」、「悪魔の落とし子」は、明らかに孤児であるヒースクリフに対する彼の見下した気持ちと嫌悪感を表しているが、注目すべきことは、「おやじをだまして何もかも取ってしまうがいいや」と言うことである。なぜならば、後にヒンドリーが予知した通りにヒースクリフは、ヒンドリーに引き継がれた父親の物を奪うことになるからだ。エミリー・ブロンテは、ネリーの語り、すなわち、“I really thought him not vindictive—I was deceived, completely, as you will hear.”(34)によって効果的に物

語を進めている。なぜならネリーの語り始める話は、劣等感を飢えつけられるようなひどい扱いを受けたヒースクリフの復讐の物語であるからだ。父親が死ぬとヒンドリーはヒースクリフを家族から使用人に格下げし、牧師について勉強することをやめさせ、こき使うことにする。この格下げをヒースクリフは我慢する。それは、キャサリンが勉強してきたことを教えてくれたり、一緒に働いたり遊んだりしてくれたからであった。しかし、クリスマスにヒンドリーに“send him into the garret till dinner is over”、“Begone, you vagabond!”(51)と言われ、食事をともにできなかったヒースクリフは、復讐心をあらわにする。ネリーは、両膝に肘をのせて頬づえをついたまま、ものも言わずにじっと考えこんでいるヒースクリフに何を考えているのかと尋ねるが、彼は、“I’m trying to settle how I shall pay Hindley back. I don’t care how long I wait, if I can only do it, at last.”(53)と言う。ネリーはヒースクリフに対し、“It is for God to punish wicked people; we should learn to forgive.”(53)と言うが、彼は“No, God won’t have the satisfaction that I shall.”(53)と言う。このネリーとヒースクリフのやりとりにおいて、読者はヒースクリフの復讐心を強く感じるだけでなく、人間はどんな目にあっても人を赦すことができるのかというエミリー・ブロンテの問いかけも感じる。ネリーとヒースクリフのやりとりは、先に述べたロックウッドの夢の中で「71倍目のはじめ」で赦せなくなる人間の姿とも重なり、作品のテーマと関係するやりとりでもある。

ただヒースクリフの復讐心を考えるとき、彼の復讐心が孤児であることからくる社会的地位と結びついていることを見落としてはならない。ヒースクリフの劣等感は、キャサリンが彼を愛しながらもエドガー(Edgar)を結婚相手に選ぶことによりさらに強められる。キャサリンは、“he’s more myself than I am.”、“Whatever our souls are made of, his and mine are the same.”(71)、“my love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath.”、“I am Heathcliff—he’s always, always in my mind.”(73)と言うほどまでにヒースクリフを愛しているにもかかわらず、エドガーと結婚する。彼女はその理由を、ヒースクリフと結婚したら二人とも乞食になってしまうけれど、エドガーと結婚したらヒースクリフの出世を助け、兄のヒンドリーの手から救い出すことができるからだと言う。しかし、キャサリンが愛しているヒースクリフでなくエドガーを選ぶことは、エドガーが美男子で金持ちであることも関係している。ヒースクリフはどうしようもない現実の壁に阻まれたことになる。ネリーが美男子で、若くて、ほがらかで、金持ちでなければエドガーを愛しはしないのではないかと聞くと、キャサリンは“No, to be sure not.”(69)と言う。リチャード・デラモラ(Richard Dellamora)は、“Through Nelly, Brontë does make the crucial

point: namely, that Catherine's betrayal of Heathcliff is a denial of his and her humanity.”(Dellamora 544)と述べているが、結婚を現実的に考えたなら、キャサリンの判断基準は当然とも言えるものである。しかし、キャサリンが自身を選ばずエドガーを選ぶことにより、ヒースクリフは復讐心と劣等感をあわせ持つこととなる。キャサリンとの宿命的な恋に破れたヒースクリフは家を飛び出し、三年間行方不明になる。その間にキャサリンはエドガーと結婚するが、やがてヒースクリフはすっかり変身して嵐が丘に戻ってくる。エミリー・ブロンテは、ヒースクリフの行方不明の前にいかに復讐心が形作られ、その影響が行方不明後にいかに現れるかという因果関係を示しているが、次に行方不明の後のヒースクリフについて考えてみたい。

3. ヒースクリフの復讐心とその影響

エミリー・ブロンテは、再びエドガーとキャサリンの前に現れたヒースクリフの様子を次のように語らせている。

Now fully revealed by the fire and candlelight, I was amazed, more than ever, to behold the transformation of Heathcliff. He had grown a tall, athletic, well-formed man, beside whom my master seemed quite slender and youth-like. His upright carriage suggested the idea of his having been in the army. His countenance was much older in expression and decision of feature than Mr. Linton's; it looked intelligent, and retained no marks of former degradation. A half-civilized ferocity lurked yet in the depressed brows and eyes full of black fire, but it was subdued; and his manner was even dignified, quite divested of roughness though too stern for grace. (84-85)

エミリーは、引用において、ひどくほっそりとしたエドガーに対したくましく堂々たる体つきのヒースクリフが、エドガーよりずっと年上に見え、むかしの落ちぶれた面影の片鱗さえ残っていない様子を描写しているが、その変化は、エドガーがヒースクリフに何と云って話しかけようかとしばらく迷うほどである。しかし、外見では立場が逆転したように見えたとしても依然として身分は同じである。また、外見は変化したとしてもネリーが説明しているように、復讐心は持ち続けたままである。再び現れたヒースクリフは、エドガーの妹イザベラ(Isabella)

の心を捕え、二人は駆け落ち結婚する。イザベラが自分をロマンスのヒーローに仕立て上げ、てっきり騎士みたいに献身的に愛してくれると思いこんだとし、“I can hardly regard her in the light of a rational creature, so obstinately has she persisted in forming a fabulous notion of my character, and acting on the false impressions she cherished.”(133)と言うヒースクリフは、イザベラの自身への行為につけこんでいると言えるが、キャサリンが死ぬ前“Oh, Cathy! Oh, my life! how can I bear it?”(139)と言うことにより、彼がイザベラではなくキャサリンを愛していることは明らかである。マギー・バーグ(Maggie Berg)は、*Wuthering Heights*の反社会的人物ヒースクリフがロマンティックな反逆においてパイロニック・ヒーローをしのぐほどであると考えただけでなく、“His obsessive quest for Catherine resembles religious fanaticism.”と述べているが(Berg 5)、エミリーはたとえヒースクリフが復讐心を持っていたとしても彼とキャサリンの愛情が純粹なものであることを示している。一方でエミリーは、復讐心を持ち続けることの結果も示している。なぜならば、死ぬ前にキャサリンは、自身の体を牢獄に譬え、天国を思い描くが、キャサリンの死後エミリーがネリーに“Gone to heaven, I hope, where we may, everyone, join her, if we take due warning, and leave our evil ways to follow good!”(147)と言わせることにより、ヒースクリフが復讐心を持ち続ければ、天国で再会できないかもしれないことを暗示しているからである。

バイロン(George Gordon Byron, 1788-1824)は、*Manfred* (1817)において、自身の愛によって恋人アスターティ(Astarte)を破滅させてしまったことに罪の意識を感じているマンフレッドを描いている。この作品において、マンフレッドは僧院長に、悔い改めて天の憐れみをねがうのに遅くはない、と言われるが、自身に天国をも自らにふさわしい地獄にかえてしまう悔恨の情があることを訴える。バイロンもエミリーも悪を善に導く力を描いているが、マンフレッドもヒースクリフも自我のみを盾として全ての権威に屈しようとしなない近代人の英雄的な姿を示しているがゆえに類似した人物であると言える。しかしヒースクリフは、復讐心を持ち続け実行に移すがゆえに悔恨の情を持つパイロニック・ヒーロー、マンフレッドとは異なっている。

ヒースクリフは、かつて身分の違いによりひどい扱いをしたヒンドリーに主客転倒により復讐する。ヒンドリーは賭博に狂い、それにつきこむ現金ほしさに所有地を残らず抵当に入れてしまい、ヒースクリフは抵当権者となり、財産をがちり握り嵐が丘の主人となる。この主客転倒は、ヒンドリーの素行が関係しているので、ヒンドリーが自ら招いた悲劇と言えるが、ヒースクリフがアーンショー

家の次世代ヘアトン(Hareton)に悲劇を体験させることから、彼が復讐心を持ち続けていることは明らかである。ヘアトンは紳士になるはずであったが、父の仇敵ヒースクリフの世話になる身分につきおとされ、自分の生まれた家の召使いとして、給金をもらわずに暮らすことになる。ヒースクリフは、肉体的にヘアトンを虐待せず、読み書きを仕込まず道徳的にも導かないことにより復讐する。このことに関しては、彼がネリーに“*I want the triumph of seeing my descendant fairly lord of their estates.*”(184)と言っているので、復讐心が社会的地位に対してもかつて彼が感じた劣等感と関係があることを示している。ヒースクリフは、身分のゆえに虐待され、愛するキャサリンと結婚できなかったのも、ヒンドリーに対しては、ヘアトンを下の身分に追いやり、またエドガーに対しては、息子のリントン(Linton)をキャシー(Cathy)と結婚させることにより財産を奪うことで復讐しようとする。

エドガーは、かつてヒースクリフに欠けていた文化的な生活の表面的な上品さを象徴する存在であり、キャサリンがエドガーに引きつけられるのは当然のことであった。金や高い身分のためだけでなく、礼儀正しき、魅力、上品さなど賞賛すべき性質を持ち合わせているため、キャサリンはかりたてられるようにエドガーと結婚したのだが、彼女自身が認めているように、彼女の最も本質的な部分からの行動ではない(Traversi 55)。このことから、拾われた孤児であるヒースクリフがキャサリンをエドガーに走らせたものの力を知っていて、次世代において、暴力的方法ではなく、金や高い身分を用いて復讐したと考えられる。読み書きを習っていないヘアトンに関し、息子リントンはキャシーにヘアトンが字が読めないと言明し、汚い言葉を使うヘアトンに対し、“*Papa told you not to say any bad words, and you can't open your mouth without one...Do try to behave like a gentleman, now do!*”(194)と言うが、ヒースクリフは息子リントンを使って、ヒンドリーの息子にかつて自身が感じた劣等感を感じさせることにより復讐していることになるのだ。しかし運命の皮肉は、リントンが病弱で内気で、彼がエドガーあての手紙に“*my father's character is not mine; he affirms I am more your nephew than his son*”(228)と書いているように、父親が持ち続けた復讐心を持ち続けられず、泣き落としでしかキャシーと結婚できないことである。キャシーは、このようなリントンとなれば強制的に結婚させられるが、注目すべきことは、エミリー・ブロンテが復讐の連鎖を絶ち切る方法を読者に示していることである。父親の死後キャシーは、ヒースクリフにリントンのことを“*I know he has a bad nature.*”, “*he's your son. But I'm glad I've a better, to forgive it.*”(254)と言うが、キャシーの言葉は、次世代にもちこされた復讐の連鎖に自身が終止符を打つという宣言である。

一方でヒースクリフは復讐心を持ち続けるが、彼の復讐心は嫉妬心と結びついている。ネリーがかつてヒースクリフを励ますため言った言葉、すなわち、“you are taller and twice as broad across the shoulders—you could knock him (Edgar) down in a twinkling.”(50)に対し、ヒースクリフがかつて言った言葉、すなわち、“But, Nelly, if I knocked him down twenty times, that wouldn't make him less handsome, or me more so. I wish I had light hair and a fair skin, and was dressed and behaved as well, and had a chance of being as rich as he will be!”(50)は、彼が階級の違いを痛感していることを示している。このことから、当然ヒースクリフがエドガーの階級に対して嫉妬心を持ち続けたと考えられる。ヒースクリフの復讐は、ひどい扱いを受けたヒンドリーに対しては、財産を奪うことと息子のヘアトンを貶めることによって果されるが、エドガーに対してはすでにキャサリンと結婚し彼女が死んでしまっているので果すことができない。そこで、ヒースクリフは死後に望みを抱くのである。彼は、ネリーに自身の死後の姿について次のように言う。

“I'll tell you what I did yesterday! I got the sexton, who was digging Linton's grave, to remove the earth off her coffin lid, and I opened it. I thought, once, I would have stayed there, when I saw her face again—it is hers yet—he had hard work to stir me; but he said it would change, if the air blew on it, and so I struck one side of the coffin loose—and covered it up—not Linton's side, damn him! I wish he'd been soldered in lead—and I bribed the sexton to pull it away, when I'm laid there, and slide mine out too—I'll have it made so, and then, by the time Linton gets to us, he'll not know which is which!” (255)

墓掘り男に金を握らせてエドガーの死体が崩れてくる前に、キャサリンと一体化しようとするヒースクリフには、キャサリンと結婚できなかったことで自身の中に生まれたコンプレックスを死後解消しようとする執着心が見られる。バーグは、*Wuthering Heights* にゴシック小説の一要素である死体愛好症を見てとっているが(Berg 6)、ヒースクリフのキャサリンに対する執着心は、エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe, 1809-1849)が *Berenice* において示した、偏執狂に匹敵するほどのものである。*Berenice* において主人公は、麗人ベレニスの歯に執着心を持ち、まだ生きているうちから埋葬されたと思われるベレニスから歯を抜き取ってくるが、死後一体化しようとするヒースクリフにも同様の執着心が見られる。しかし、*Berenice* と *Wuthering Heights* の違いは、*Berenice* においてポーが主人公が救われ

る方法を示さずゴシック・ホラーのみを示している一方、*Wuthering Heights* においてはエミリーがヒースクリフの救われる方法を示していることである。

後に衰弱し、死期を悟ったヒースクリフは、遺言状や財産のことについて考えるが、ネリーは彼に対し、悔い改めるべき悪行がたくさん残っていること、13歳の頃からキリスト教徒らしくない生活を送ってきて、聖書を手にしたことなどほとんど一度もなかったこと、を挙げて反省を促すだけでなく、“Could it be hurtful to send for some one—some minister of any denomination, it does not matter which, to explain it, and show you how very far you have erred from its precepts, and how unfit you will be for its heaven, unless a change takes place before you die?”(296-97)と言う。しかしヒースクリフは、悪行などやった覚えがないので、悔い改めることはないと主張するだけでなく、“I have nearly attained my heaven; and that of others is altogether unvalued and uncovered by me!”(297)と言う。エミリーは、ヒースクリフの墓場での再会は望ましいが十分なものでなく、彼自身が遺骨に混ざり合うだけでなく、悔い改めないかぎり「すばらしい世界」でキャサリンと一緒になれないことをネリーの言葉を通して伝えているが、最後まで復讐心を持ち悔い改めないヒースクリフを示すことにより、両者が天国で再会できない可能性を暗示している。⁴

かつてはエドガーのものでありそして後にヒースクリフのものとなるスラッシュェクロス(Thruscross)屋敷のある場所は、ワーフェイル(Wharfedale)のスラッシュェクロス村の近くのヘアウッド(Harewood)をモデルとしている。1833年エミリーは、ヘアウッドを訪れている。ヘアウッドは、ヘンリー・ラッセルズ(Henry Lascelles)が所有する土地であった。ラッセルズは、ワーフェイルにも地所を持ちさらにバルバドス(Barbados)(=西インド諸島の島で英植民地)にも農場を持っていた。19世紀初期にラッセルズは、ミルトン(Milton)卿の対抗馬としてヨークシャー州から立候補した。ミルトン卿は奴隷制度反対論者であり、奴隷制廃止論者のリーダーであるウィリアム・ウィルバーフォース(William Wilberforce)の支持を受けて選挙運動をし、勝利した。ウィルバーフォースはまたエミリーの父親パトリック・ブロンテがケンブリッジで牧師の勉強をしているときパトロンであった(Dellamora 547)。パトリックはジョン・ウェスレー(John Wesley, 1703-91)の支持者でもあった。ブロンテ家に大きな影響を与えたメソヂスト運動とは18世紀初頭の英国国教会の無気力、沈滞を突き破るような形で起こったので、信仰復興のさきがけとして高く評価されている。メソヂスト運動は、国教会内に福音主義運動(Evangelism)を巻き起こした。注目すべきことは、ウェスレーもウィルバーフォー

スもパトリックも皆アルミニウス派であったことだ。アルミニウス(Jacobus Arminius, 1560-1609)は、地獄へ行くよう運命づけられている人間もいると主張するカルヴィン主義者と対照的に全ての人間に神の恩寵があると信じるオランダの改革派神学者であった(Dellamora 549-550)。アルミニウス主義とは、カルヴィン主義の予定説に疑問を持ったことから生まれた神学的潮流である。カルヴィンは、神の聖定によって選ばれた者のみが救いに与り、キリストにあつて義とされるとした。アルミニウス主義においては、神は誰がキリストを信じるかを見ており、信じる者を天国へ選ぶことを決める、救いとは信仰に条件づけられているので、救いへの備えが万人のものである、としている。すなわち、アルミニウス主義は、キリストの贖罪は彼を意識的に拒む全ての者をも含む全ての人のためのものである、信じないで救われるわけではないが、神の哀れみと恵みは予定されるものではない、としている。ウェスレーは、全ての人はアダムの罪ゆえに全的に墮落しているが、キリストの十字架上の死を通して、神の恵みは全ての人に注がれている、その恵みによって、人は自由意志を用いて、福音に与ることができるとした。ウェスレーの宗派は、同じメソディスト派でもジョージ・ホワイトフィールド(George Whitefield, 1714-70)のカルヴィン主義メソディスト派(Calvinistic Methodists)とは異なる宗派である。このことから、ハワースにカルヴィン主義者の偏狭な偏見があつたとしても、万人に救いへの備えが可能であるとするアルミニウスやウェスレーの神学を支持するパトリックと彼の影響を受けた人々がいたことが解る。

エミリーは、当然奴隷解放運動を知っているだけでなく、宗教的に父親の影響(アルミニウス派の影響)を受けていると考えられるが、かつて使用人として屈辱感を味わったヒースクリフに同情の余地があつたとしても、復讐心を持ち続けることは、彼を神の恩寵から遠ざけることとなることをエミリーは *Wuthering Heights* において示している。

結び

以上、*Wuthering Heights* において、孤児であるヒースクリフが復讐心を持つことにより、彼自身の運命にいかなる影響を与えるかについて考えてきたが、エミリー・ブロンテは、ヒースクリフの復讐心が拾われた孤児であるということへのコンプレックスと結びついて根深いものであることを示す一方、復讐心を持ち続けるがゆえに、彼が天国で愛するキャサリンと再会できない可能性を暗示してい

る。ヒースクリフは、自身のコンプレックスをヒンドリーの息子であるヘアトンに体験させることにより復讐するが、皮肉なことにひどい扱いを受けたはずのヘアトンは、ヒースクリフの死を心から悲しみ、キャサリンと似たキャシーと結婚する。エミリーは、ヒースクリフが復讐心を持つことをヒンドリーから受けた仕打ちやキャサリンと結婚できなかったことの当然の結果であることを示している一方、人間は赦しを実践することでしか復讐心から解放されず、復讐心を持ち続けなければ、生前も死後も永遠に幸福にはなれないことを示している、と言っているだろう。

注

- 1 エミリー・ブロンテは、1835年7月から10月までロー・ヘッド(Roe Head)の寄宿学校で学び、1836年彼女はハリファックス(Halifax)の小さな塾で教師をした。1842年エミリーは、シャーロットとともに、ブリュッセル(Brussels)の寄宿学校に留学した。
- 2 ヴォグラー(Thomas A. Vogler)は、ロックウッドのリア(Lear)王への言及を、彼の文学的な好みへの反映ととらえるだけでなく、不当に扱われた王でもなければ虐待されたりしたわけでもないのに、ロックウッドにはリア王の片鱗さえないと考えている。さらにヴォグラーは、“he is like Lear in being on the brink of a self-discovery made possible by the loss of a world of appearances, and the discovery of natural forces that cannot be denied. His mental state even approaches Lear’s madness.”と述べている (Vogler 82)。ロックウッドのリアへの言及は、ヴォグラーが述べているように、彼の狂気に近い精神状態を示すためであると考えられるだけでなく、物語を暗示するためでもあると考えられる。*King Lear* において、年をとったリア王は領地を三人の娘に配分しようとする。長女ゴネリル(Goneril)、次女リーガン(Regan)は、へつらいの言葉で老王を喜ばせるが、三女コーディリア(Cordelia)は、真の孝心を抱きながらことさら控えめな言葉を用いるので勘当され、真実を見ぬいたフランス王に妃として迎えられる。リアは長女と次女の世界話になろうとするが、両者は約束を守らず、老王を虐待して追い出す。リアはついに嵐の荒野を彷徨する身となる。エミリー・ブロンテは、ロックウッドにリア王に言及させることにより、*Wuthering Heights* において孤児のヒースクリフに家に乗せられた人間の心理を暗示している。
- 3 エミリーは、*Wuthering Heights* の“Wuthering”という形容詞について、次のように説明している。*Wuthering Heights* is the name of Mr. Heathcliff’s dwelling, “Wuthering” being a significant provincial adjective, descriptive of the atmospheric tumult to which its station is exposed in stormy weather. (2)
- 4 作品の初めにロックウッドが見るキャサリンらしき子供の幽霊の場面から、キャサリンが天国に行かず荒野をさまよっているように感じる読者もいるかもしれない。この場面に関しては、エミリーがゴシック小説を思わせる怪奇小説の設定がストーリー展開において必要だと考えたと思われる。“Let me in—let me in!”(20)と言う子供が手を離そうとしないので、ロックウッドは子供の手首を壊れた窓ガラスに押しつけ、ぐいぐいとこすりつける。その結果、敷布が流れ落ちる血で

べつとり濡れてしまう。それでも子供が“Let me in!”(21)と繰り返し、つかんだ手をはなそうともしないので、ロックウッドは恐怖で気も狂わんばかりになる。ジャイベシュ・バッタチャリヤ (Jibesh Bhattacharyya)は、この場面の描写について、“This description is almost as horrible and blood-curdling as any found in a traditional Gothic novel. But our tension is lowered when we realise that all this happened in Lockwood’s dream.”と述べている(Bhattacharyya 89)。

青山誠子氏は、「エミリーは *Wuthering Heights* で、各人にそれぞれの天国があるという考えを表明した。キャサリンとヒースクリフにとっては、天国は地上の荒野にあり、地獄もまた地上の、この世の苦悩の中にあった」と解釈している(青山 216)。エミリーは、キャサリンが実際に天国に行ったかどうか明示していないが、ネリーが語る死後の様子により、天国に行ったキャサリンを暗示している。エミリーは、キャサリンの様子を“perfect peace”(145)、“no angel in heaven could be more beautiful than she appeared.”(145)と描写している。死ぬ前にキャサリンが自身の体を壊れた監獄に譬え、「輝かしい世界」へ行きたいと望むことから、エミリーは天国に旅立ったキャサリンを印象づけている。このことは、ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)が *The Old Curiosity Shop* (1841)でネル(Nell)の死を“No sleep so beautiful and calm, so free from trace of pain, so fair to look upon.”(538-39)と表現し、キット(Kit)が子供たちに、ネルが天国に行ったこと、また良い人間になればそこへ行ける、と話すことを思い起こさせる。また、ディケンズは天に召されたネルをキットが持ってきた「籠の中の鳥」で象徴的に描いている。「籠の中の鳥」は、いわば、地上の牢獄から解放された天上的な魂のメタファーと言っている。“Gone to heaven, I hope, where we may, everyone, join her, if we take due warning, and leave our evil ways to follow good!”(147)というネリーの言説が意味を持つには、キャサリンが天国に行ったということが前提となる。

Works Cited

- Berg, Maggie. *Wuthering Heights: The Writing in the Margin*. New York: Twayne Publishers, 1996.
- Bhattacharyya, Jibesh. *Emily Brontë's Wuthering Heights*. New Delhi: Atlantic Publishers and Distributors, 2007.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. Oxford: Oxford UP, 1976.
- Dellamora, Richard. “Earnshaw’s Neighbor/Catherine’s Friend: Ethical Contingencies in *Wuthering Heights*”, *ELH* Vol. 74. Ed. Francis Ferguson. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 2007.
- Davies, Steviés. *Emily Brontë: Heretic*. London: The Women’s Press, 1994.
- Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. New York: Oxford UP, 1991.
- Kettle, Arnold. “Brontë: *Wuthering Heights*”, in *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights*. Ed. Thomas A. Vogler. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1968.
- Robinson, A. Mary. *Emily Brontë*. London: Routledge / Thoemmes Press, 1997.

- Sanger, Charles Percy. "The Structure of *Wuthering Heights*", in *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights*. Ed. Thomas A. Vogler. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1968.
- Traversi, Derek. "The Brontë Sisters and *Wuthering Heights*", in *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights*. Ed. Thomas A. Vogler. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1968.
- Vogler, Thomas A. "Story and History in *Wuthering Heights*", in *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights*. Ed. Thomas A. Vogler. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1968.
- 青山誠子, 『ブロンテ姉妹』, 清水書院, 1994.

モウビィ・ディックと原罪——『白鯨』における一考察

上野未央

SYNOPSIS

In *Moby-Dick; or the Whale*, Ahab's rebellion against Moby Dick begins with his loss of a leg, which Herman Melville depicts as a kind of castration. In this paper, I will discuss Ahab's symbolic castration, which is also symbolic of Original Sin, from the point of view of the Romantics' concept of the unconsciousness.

Ahab is considered to be a strong-willed man, but in fact he is confused by his own unconscious mind. Moby Dick, a projection of Ahab's unconscious mind, is originally a sperm whale. Moby Dick bites off Ahab's leg and thus metaphorically castrates him. Ahab's rebellion is triggered by Moby Dick, so Melville regards Moby Dick—Ahab's unconscious mind—as the root cause of Ahab's rebellion.

At the same time, Moby Dick is also a projection of God who corrupted human beings because of their Fall. Ahab castrated by Moby Dick is representative of corrupted human beings. This is why Melville depicts Ahab's castration as Original Sin. *Moby-Dick* is a story about the rebellion against a God who corrupted human beings.

はじめに

エイハブ (Captain Ahab) には、その属性を象徴すると思われる「痣」と「隻脚」という身体的特徴が備わっている。この象徴性の説明が、『白鯨』(*Moby-Dick; or the Whale*, 1851) 読解の重要な手がかりになるという観点から、本稿は、エイハブにおける片脚の喪失が象徴的去勢であること、並びにハーマン・メルヴィル (Herman Melville) がその去勢に原罪の意味合いを持たせていることについての考察を試みるものである。

エイハブの去勢が原罪の象徴であることについては、すでに青山義孝が「盲壁の夢想——その1」の中で霊と魂の違いに着目しながら永遠の生命との関連において論じている。そこで、本稿では、『白鯨』の思想的背景をなすロマン主義の時代には、「人間存在の真の根底」(エレンベルガー 242) にあるものとして無意識を捉え、無意識に関する大胆な思索が行われていた事実を想起し、原罪の象徴と

してのエイハブの去勢を、この無意識との関連において考察したい。『白鯨』のプロットの中心をなすエイハブのモウビィ・ディック (Moby Dick) への反抗の契機が象徴的去勢であること、そしてその反抗の対象となるモウビィ・ディックが sperm whale すなわち「精子鯨」であることを考え合わせれば、エイハブの去勢は無意識との関連性を追求しながら検討する必要があるように思われる。

無意識が、『白鯨』読解の上で考えるべき重要な要素のうちの一つであることは確かである。例えば、*The Twisted Mind* の中でメルヴィルが当時の精神衛生事情に精通していたことを詳述するポール・マッカーシーは、“Melville’s treatment of Ahab’s monomania is innovative in another sense. It shows for the first time in Melville’s fiction a lengthy, detailed dramatization of unconscious levels of the mind.” (McCarthy 70) と述べている。あるいは、ジョン・ハルヴァーソンは深層心理学の観点から『白鯨』を読み解き、ユング心理学における影や元型の概念が『白鯨』を読み解く際の重要な鍵であることを論証している (Halverson 参照)。しかし、マーティン・ビクマンは、メルヴィルを精神分析学の先駆であると言うよりもむしろジークムント・フロイト (Sigmund Freud) を “post-Romantic or post-Melvillean” と位置づけ、“Melville was immersed in and contributed to the currents of thought that helped produced psychoanalysis [. . .]” (Bickman 516) と言う。メルヴィルとロマン主義との関係については、マイケル J. ホフマンが、“By making Ahab the symbol of Transcendental magnificence, but by giving him the one flaw he felt that Emerson had not foreseen, Melville dramatizes this fallacy of the Transcendental position. Ironically, he accepts Emerson’s prime image, but he rejects the value Emerson placed upon it.” (Hoffman 11) と述べている。本稿は、このホフマンの弁に異論を唱えるものではない。しかし、ビクマンの弁を踏まえた上で、無意識に焦点を絞り『白鯨』を再考すれば、反ロマン主義という言葉だけでは語りつくすことのできないメルヴィルとロマン主義との関係が明らかになるのではないだろうか。そのためにもエイハブの去勢を無意識との関連において考察する必要があると思われる。そこで、以下においてメルヴィルがエイハブの去勢に原罪の意味合いを持たせていること、及びモウビィ・ディックの象徴性を切り口として考察を進めることにする。

1. エイハブの身体的特徴とモウビィ・ディック

まず、「痣」に注目しよう。エイハブの顔を走る「鉛色の傷痕」 (“the livid brand”) を、イシュメール (Ishmael) は稲妻にうたれ巨木の幹に残った傷痕にたとえてい

るが、マン島出身の男 (Manxman) は、この傷痕を「生まれながらの痣」(“a birth-mark”) (109)¹であると言う。ここにおける「生まれながらの痣」は、ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) の短編「痣」(“The Birthmark”, 1843) のヒロイン、ジョージアナ (Georgiana) の痣に繋がるものであると思われる。ジョージアナの左の頬にある小さな痣は、ホーソーン自身が “It was the fatal flaw of humanity which Nature, in one shape or another, stamps ineffaceably on all her productions, either to imply that they are temporary and finite,[. . .]” (Hawthorne 120)、 “the symbol of his wife’s liability to sin, sorrow, decay, and death” (Hawthorne 120)、 “that sole token of human imperfection” (Hawthorne 130) などと説明していることから、原罪の象徴と解釈して差し支えないだろう。『新カトリック大事典』によれば、原罪とは、アダム (Adam) とエバ (Eve) の自罪の結果としての、人類における原始義の状態の喪失を意味し、この原始義の喪失ゆえに、人類には「肉体上の死」がもたらされ、人類はありとあらゆる悪に苦しめられるようになった (『新カトリック大事典』第2巻 781)。つまり、原罪は、人間が有限であること、すなわち人間の不完全性を示す印である。メルヴィルは、エイハブの傷の説明のために原罪の象徴であるジョージアナの痣を思わせる痣を引き合いにだし、エイハブに原罪を背負う人間の姿を体現させようとしたものと思われる。さらにもう一つ、原罪の象徴と見做されるエイハブの身体的特徴が、隻脚であることである。

エイハブは前回の航海で片脚を喪失して以来義足をつけている。今回の航海の少し前のある夜、エイハブはピークオッド号 (Pequod) の床にうつぶせになって気を失っているのを発見されるが、その時彼の身に起きていたことが次のように描写されている。

[. . .] by some unknown, and seemingly inexplicable, unimaginable casualty, his ivory limb having been so violently displaced, that it had stake-wise smitten, and all but pierced his groin; nor was it without extreme difficulty that the agonizing wound was entirely cured. (355)

超自然的な何かのせいで、義足である「象牙の脚が激しく転移し、エイハブの鼠蹊部に突き刺さった」とあることから、エイハブにおける片脚の喪失は、青山、ニュートン・アーヴィンあるいはジョン・ブライアントなどが指摘するように、象徴的去勢と解釈できよう (『盲壁の夢想』3-4, Arvin 171-72, Bryant 79²)。アーヴィンは、エイハブの象徴的去勢を次のように説明している。

The Whale, in what looks like conscious malice, has reaped Ahab's leg away with his frightful, sickle-shaped jaw, and Ahab must now rely on a dead, artificial leg made of a Sperm Whale's jawbone. A kind of castration, in short, has been not only imagined and dreaded but inflicted, and the phallic source of vital potency has been replaced by an image of impotence and lifelessness, constructed from the skeleton of the injurer himself. (Arvin 171-72)

ここで、人類に原罪がもたらされた経緯を振り返っておきたい。かつて、アダムとエバは、神に創造され永遠の命を持った完全な状態でエデン (Eden) の園に暮らしていた。彼らは園の中央にある木の実だけは食べてはいけないと神に命令されている。ところがある時、エバは蛇の姿をしたサタン (Satan) に出会い、サタンは木の実を食べるようエバを唆す。創世記 (Genesis) には、この時のサタンの言葉が次のように記されている。

And the serpent said unto the woman,
Ye shall not surely die;
For God doth know that in the day
ye eat thereof, then your eyes shall be
opened, and ye shall be as gods, knowing
good and evil. (Genesis 3: 4-5)

さらにジョン・ミルトン (John Milton) は、創世記におけるこのエピソードを、『失樂園』 (*Paradise Lost*, 1667) の中で劇的に脚色し、サタンの言葉を次のように表現している。

[. . .]: he knows that in the day
Ye eat thereof, your eyes that seem so clear,
Yet are but dim, shall perfectly be then
Opened and cleared, and ye shall be as gods,
Knowing both good and evil as they know.
That ye should be as gods, since I as man,
Internal man, is but proportion meet,

I of brute human, ye of human gods.
So ye shall die perhaps, by putting off
Human, to put on gods, death to be wished,
Though threatened, which no worse than this can bring.
And what are gods that man may not become
As they, participating god-like food? (Milton 203-04)

この木の実を食べれば神のようになれるというサタンを聞いたエバは、神のようになりたいという思いを抱き、神の命令に背いて木の実を食べ、アダムもそれに追従する。神は、食べてはいけないという命令に背いた罰として、アダムとエバから永遠の命を奪い去り、そのため人類には死がもたらされることとなった。

以上の原罪に至る経緯を勘案すれば、エイハブは、モウビィ・ディックに片脚を食いちぎられただけにとどまらず、象徴的去勢を通して生命の源をも奪われたことになると言える。メルヴィルがエイハブの復讐を、“He piled upon the whale’s white hump the sum of all the general rage and hate felt by his whole race from Adam down;[. . .].” (156) と表現し、しかもエイハブに、“I feel deadly faint, bowed, and humped, as though I were Adam, staggering beneath the piled centuries since Paradise.” (406) と発言させていることから、エイハブのモウビィ・ディックへの復讐には、アダムとエバの墮罪の神話が反映されており、青山が「神はアダムの墮罪に際し、罰として人間の無限の能力を奪ったが、この神の行為に対してエイハブは牙をむけるのである。[……] エイハブはアダム以来の全人類が己の能力を奪い有限の身に貶めた神に向かい、満腔の怒りと憎しみをこめて反逆に転じる巨人である」(「盲壁の夢想」3) というように、エイハブは、人間を、原罪を負う状態へと貶めた神に対する怒りと憎しみに凝り固まっていることがわかる。エイハブにおける片脚喪失とそれに伴う去勢は、すなわちエイハブがモウビィ・ディックに生命の源を奪われたことを象徴することとなり、したがって神がアダムとエバの墮罪に対する罰として人間の永遠の生命を奪ったことの一種の寓話と捉えて差し支えないだろう。『白鯨』においてメルヴィルは、象徴的レベルでモウビィ・ディックをしてエイハブを去勢せしめ、その去勢に原罪の意味合いを持たせている(「盲壁の夢想」3-4)。エイハブの復讐は、アダムとエバの墮罪の際に、人間を不完全な存在へと貶めた神に対する反逆に等しいものであると言えるのである。

では、モウビィ・ディックを原罪の淵源にあるものとして捉え、その象徴性の

解明に移りたい。モウビィ・ディックはエイハブを不完全な存在へと貶めた元凶であり、エイハブの復讐には墮罪の神話が反映されている。したがって、モウビィ・ディックはアダムとエバを墮落させたサタンと、墮罪の罰として人間から永遠の命を奪った神とのダブルイメージの投影であることが考えられ、この意味で、エイハブにとってモウビィ・ディックは、神とサタンが渾然一体となった超越的存在である。一方、モウビィ・ディックは、青山の指摘にもあるように、白い抹香鯨を指し、英語では sperm whale すなわち「精子鯨」を意味する（「盲壁の夢想」4）。D. H. ロレンス (D. H. Lawrence) は『アメリカ古典文学研究』(*Studies in Classic American Literature*, 1923) の中でモウビィ・ディックを“*He is the deepest blood-being of the white race. He is our deepest blood-nature.*”あるいは“*The last phallic being of the white man*” (Lawrence 146) と表現しているが、まさにこの意味で、モウビィ・ディックはかつてエイハブが持っていた生命の源を象徴するものであると言える。しかし、モウビィ・ディックはその源をエイハブから奪い去り、彼に肉体的苦痛を強いた悪魔としての側面をも併せ持っている。次の引用文を見てみよう。

The White Whale swam before him as the monomaniac incarnation of all those malicious agencies which some deep men feel eating in them, till they are left living on with half a heart and half a lung. That intangible malignity which has been from the beginning; to whose dominion even the modern Christians ascribe one-half of the world; [. . .]. (156)

ここでは、エイハブの前を遊弋するモウビィ・ディックが、人間の内部を蝕む邪悪なものの化身、世の初めから存在する「捉えようのない悪」の化身であることが記されている。つまり、エイハブにとってモウビィ・ディックは人間の生命の源にして苦悩を強いる悪魔、人間の内部に潜む悪、罪の根源であるものの投影であることも考えられるのである。モウビィ・ディックは一面においては神とサタンのダブルイメージであるとともに、他面においては人間の生命の源でありながら、人間に苦悩を強いる悪魔としての側面を併せ持つ超自然的存在なのである。次に、この人間の生命の源でありながら、人間に苦悩を強いる悪魔としての側面を併せ持つ超自然的存在としてのモウビィ・ディックについて考えたい。

2. モウビィ・ディックと原罪

イシュメールがモウビィ・ディックを“Dissect him how I may, then, I but go skin deep; I know him not, and never will.” (296) と言うように、モウビィ・ディックの特徴の一つはその捉えどころのなさにある(「盲壁の夢想」15)。エイハブもまた、モウビィ・ディックを「底知れぬもの」と言うが、しかしその「底知れぬもの」をエイハブは「正体は知れぬがしかしちゃんと筋道にかなったもの」とであると語る。次の引用文を見てみよう。

“Hark ye yet again,—the little lower layer. All visible objects, man, are but as pasteboard masks. But in each event—in the living act, the undoubted deed—there, some unknown but still reasoning thing puts forth the mouldings of its features from behind the unreasoning mask. If man will strike, strike through the mask! How can the prisoner reach outside except by thrusting through the wall? To me, the white whale is that wall, shoved near to me. Sometimes I think there’s naught beyond. But ‘tis enough. He tasks me; he heaps me; I see in him outrageous strength, with an inscrutable malice sinewing it. That inscrutable thing is chiefly what I hate; and be the white whale agent, or be the white whale principal, I will wreak that hate upon him. Talk not to me of blasphemy, man; I’d strike the sun if it insulted me. For could the sun do that, then could I do the other; since there is ever a sort of fair play herein, jealousy presiding over all creations. But not my master, man, is even that fair play. Who’s over me? Truth hath no confines.” (140)

エイハブは、モウビィ・ディックを自分の前に立ちただかり、「底知れぬ悪意を秘め」「凶暴な力」で自分にのしかかってくる「壁」とであると言う。その「壁」の向こう側には、「正体は知れぬがしかしちゃんと筋道にかなったもの」が隠れている。エイハブには、この「底知れぬもの」が何よりも憎い。エイハブにとって、この「底知れぬ悪意を秘めた」「壁」(140) は、“he at last came to identify with him, not only all his bodily woes, but all his intellectual and spiritual exasperations.” (156) とあるように、「あらゆる肉体的苦悩のみならず、あらゆる知的、精神的憤怒」と絡まりあって、モウビィ・ディックに結びついている。モウビィ・ディックは、エイハブにとって「すべての悪」(“all evil”) の化身である。その「悪」とは、すなわち次のようである。

All that most maddens and torments; all that stirs up the lees of things; all truth with malice in it; all that cracks the sinews and cakes the brain; all the subtle demonisms of life and thought; all evil, to crazy Ahab, were visibly personified, and made practically assailable in Moby Dick. (156)

エイハブにとって、この世のありとあらゆる悪や不条理がモウビィ・ディックに結びつき、攻撃対象となっている。

さらにエイハブは、この自分の前に立ちはだかるモウビィ・ディックを、『白鯨』第132章では次のように表現している。

“What is it, what nameless, inscrutable, unearthly thing is it; what cozening, hidden lord and master, and cruel, remorseless emperor commands me; that against all natural lovings and longings, I so keep pushing, and crowding, and jamming myself on all the time; recklessly making me ready to do what in my own proper, natural heart, I durst not so much as dare? Is Ahab, Ahab? Is it I, God, or who, that lifts this arm?” (406)³

エイハブは、出航後間もなく今度の航海の真の目的が自分の片脚を食いちぎったモウビィ・ディックへの復讐であることを乗組員に告げ、復讐という明確な意図を持ってピークォッド号のことを顧みることなくひたすらモウビィ・ディックだけを追跡していたはずである。ところが、この引用文の中でエイハブは、モウビィ・ディックとの直接対決を前にナンタケット (Nantucket) に引き返すよう主張するスターバック (Starbuck) を相手に、自分が「諭えようもなく不可解な、この世ならぬもの」に突き動かされており、それは、「偽り多く正体不明の君主、無慈悲で冷酷な帝王」であるかのように、「敢えてしようとはせぬこと」を自分にさせようとする、と述べている。捉えようのないモウビィ・ディックは、エイハブにのしかかり、突き動かし、「敢えてしようとはせぬこと」をエイハブにさせようとする。イシュメールは、ピークォッド号の後甲板で初めてエイハブの姿を見たときの印象を、“Captain Ahab stood erect, looking straight out beyond the ship’s ever-pitching prow. There was an infinity of firmest fortitude, a determinate, unsunderable willfulness, in the fixed and fearless, forward dedication of that glance.” (109) と述べており、エイハブが、いかに強い意志——ジョン・ウエンケの言葉

を借りれば「神のごとき自我」(“Ahab’s god-self”) (Wenke 140)——を持ってモウビィ・ディック追跡へ執念を燃やしているかが窺われる。確かに、“Talk not to me of blasphemy, man; I’d strike the sun if it insulted me. For could the sun do that, then could I do the other;[. . .].” (140) あるいは “I now prophesy that I will dismember my dismemberer. Now, then, be the prophet and the fulfiller one. That’s more than ye, ye great gods, ever were.” (143) などと豪語し、モウビィ・ディックという超越的存在に不屈の意志を持って戦いを挑むエイハブを、その反逆精神のゆえにロマン主義的人物——「原罪の教義を拒否する人たち」(“all those who reject the doctrine of Original Sin”) (Stewart 46)——と見做すことは可能である。しかし、メルヴィルはここでは「何やらわからぬもの」(“nameless, inscrutable, unearthly thing”) に翻弄される存在としてエイハブを描いている。エイハブは、「何やらわからぬもの」に突き動かされ、翻弄されて、不屈の意志を持って超越的な存在に戦いを挑む。では、エイハブを翻弄する「何やらわからぬもの」とは、何であろうか。

メルヴィルの生きた時代はロマン主義の時代であった。エイハブをロマン主義的人物と見做すことができるように、『白鯨』にはメルヴィルがその時代の精神を意識していたことが示されている。エイハブを翻弄する「何やらわからぬもの」の解明のために、ここでロマン主義についてふれておきたい。

ロマン主義の主要な特徴の一つは、無意識に関する思索である。啓蒙主義の狭隘な人間学を退け、より広い視野で人間を見ることを切望したロマン主義者たちは、人間の内面を重視し、「人間存在の真の根底」(エレンベルガー 242)にあるものとして無意識を捉え、無意識に関する大胆な思索を行っている。それは、深層心理学の発展に貢献するものであったが、このロマン主義の時代には、人間の本質を見極めようとするロマン主義者たちの思索によって、無意識的なものにおける次の二つの側面が明らかにされている。つまり、無意識的なものとは、「一方で人間をより高次の目的に導くことができた。しかし、他方で彼の内部と周囲にひそむ悪魔的なものを解き放つこともできた」(パウマー 636)。つまり、ロマン主義者たちにとって無意識的なものは、創造力の源泉として人間にとって肯定的な側面を持つものとして、他方では人間に苦悩を負わせる悲観的な側面を持つものとして認識されていたのである。

ところで、メルヴィルの言う「何やらわからぬもの」とはこの無意識に相当するのではないか。『白鯨』における「何やらわからぬもの」は、メルヴィルにとって意識の及ばぬ領域にあるものであるが故に捉えようのない「何やらわからぬもの」と言うほかなく、メルヴィルは、その人間に苦悩を強いる「何やらわからぬ

もの」をモウビィ・ディックの姿で描きだし、それに翻弄される存在としてエイハブを描いている。ウェンケは、エイハブにおける「神のごとき自我」の揺らぎを “Now, however Ahab does not depict himself as equal to the gods. He perceives the gods not (as they hitherto have been) as immanent beings but as mechanical forces outside the self.” (Wenke 142) と説明する。⁴ しかし、エイハブを翻弄し、復讐へと駆り立てる「何やらわからぬもの」とは、すなわち人間に苦悩を強いるものとしての無意識であり、モウビィ・ディックはこうした無意識における悲観的なものの化身であることを主張したい。⁵

先ほど述べた無意識的なものが人間に苦悩を負わせる悲観的な側面を持つものとしての認識を持つロマン主義者たちの中でも、後世とりわけフロイトの無意識説に大きな影響を及ぼすことになるのが、アルトゥル・ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer) である (エレンベルガー 248)。ショーペンハウアーは、『意志と表象としての世界』(*Die Welt als Wille und Vorstellung*, 1819) の中で、盲目的な人間の「意志」は、人間を翻弄し、人間に不幸をもたらすものであると述べている。⁶ メルヴィルが『白鯨』執筆中にショーペンハウアーの著作を読んだ証拠はないものの、ロマン主義時代における特有の思考パターンが存在し、それがショーペンハウアーとメルヴィルの両者に共通していることが考えられる。⁷ なぜなら、両者の無意識的なものに関する考察にはある類似点を認めることができるからである。その類似点とは、すなわち無意識的なものとの関連における人間本性の捉え方、つまり「何やらわからぬもの」が人間の意識の及ばぬ領域に潜み、それによって人間は苦悩を強いられ、翻弄される存在であるという認識である。エイハブの反逆行為の淵源には、後にモダニストたちが無意識と呼ぶことになるものが密接に関わっているのである。

こうして『白鯨』の思想的背景をなすロマン主義について、とりわけ無意識に焦点を絞って考察すれば、エイハブについて考える際には欠かすことのできない要素である反抗と原罪が、ともに無意識的なものをその淵源に持ちながら複雑に絡まりあっていることがわかる。ランダル・スチュアートは、反抗が原罪の主要な顕示であると指摘している (Stewart 98) が、エイハブの場合、反抗の主因は生命の源を奪われ不完全な存在に墮したことへの怒りである。不完全な存在に墮したゆえにエイハブの中には「何やらわからぬもの」が生じ、その「何やらわからぬもの」がエイハブを「敢えてしようとはせぬ」こと、すなわち神への反抗へと駆り立てる。メルヴィルは、エイハブの生命の根幹に関わる部分を去勢し、しかもその去勢に原罪の意味合いを持たせているが、そうすることによって生命の源を

エイハブは、確かにロマン主義的人物である。ただし、それは人間が無限の能力を秘め、完成される存在であるという意味においてではなく、あくまで人間は自分の意識の及ばない領域にある制御しがたい「何やらわからぬもの」によって翻弄される不完全な存在であるという意味においてである。エイハブの反抗の対象となるモウビィ・ディックは、生命の源にして人間の内部を蝕む悪、つまり無意識的なものの投影であるのみならず、神とサタンのダブルイメージとなって、エイハブにのしかかり破滅へと押し流す。モウビィ・ディックの象徴性と、モウビィ・ディックに反撃を試みながらも最終的には敗北を喫するエイハブの姿から、メルヴィルにとって人間とは、外部からはキリスト教道徳などに束縛される存在であるとともに、内部からは、人間の奥深いところから自分ではそれとは気づかない無意識的なものによって翻弄される「非合理的存在」⁸であるということを読み取ることができる。

メルヴィルはエイハブをモウビィ・ディック追撃へ執念を燃やす意志強固な人物として描きだす一方で、捉えようのない「何やらわからぬもの」に翻弄される「非合理的存在」としても描いている。伊藤整は、「同一の人間における二種の違った心の動き」が、19世紀終わりごろから人間の本質を表現する思想として大きく取り扱われだしたと述べている（伊藤 151）。ロマン主義からモダニズムへと至る流れの中でこのような思想的背景にあるのは、深層心理学の影響であり、さらにその淵源としての無意識に関わるロマン主義思想の影響である。メルヴィルは、こうしたロマン主義思想を『白鯨』の中に描きだしているのである。

注

本稿は日本アメリカ文学会関西支部例会（2008年10月4日、於神戸女学院大学）における研究発表の原稿を加筆修正したものである。

1 テキストには *Moby-Dick; or the Whale*. Ed. Hershel Parker and Harrison Hayford. New York: W. W. Norton, 2002. を使用した。以下この本からの引用は本文中にカッコで頁数のみを示す。

2 ブライアントは、エイハブの象徴的去勢を次のように解釈している。

[...] we recognize not only that Ahab's physical loss is sexual impotency, but also that this sterility is in addition a loss of creativity, as manifested in his longing for his lost, nurturing "mother". But Ahab has compressed his sexual loss into a desperate ontological affair. [...] Ahab's repressed sexual wound leads him to rig up a defiant response to the problem of being that simultaneously gives gender to being (mother) and then takes her away (nothingness). And that response strikes us as both poignant and sadly pathological, if not delusional. (Bryant 79)

- 3 寺田建比古は、このエイハブの独白を引用し、「アハブにとってもまた、神は全宇宙事象を、微小な細部に至るまで運命予定的に計画し、支配する根本意志である」(寺田 101) と述べている。
- 4 エイハブの内面に関しては、ウェンケは次のような解釈を示している。
Ishmael also uses representational characters to reflect aspects of Ahab's ontology. On the *Pequod*, Fedallah and Pip embody projections of Ahab's innermost being—Fedallah as the demonic aspect of Ahab's "characterizing mind" and Pip as the mad, maimed, indigent sign and justification of Ahab's purpose. (Wenke 136-37)
- 5 ちなみに、ロレンスは次のように述べている。
[...] he [Moby-Dick] is hunted, hunted, hunted by the maniacal fanaticism of our white mental consciousness. We want to hunt him down. To subject him to our will. And in this maniacal conscious hunt of ourselves [...] we get them all to help us in this ghastly maniacal hunt which is our doom and our suicide. [...] The *Pequod* went down. And the *Pequod* was the ship of the white American soul. She sank, [...]. (Lawrence 146-47)
- 6 アンリ・F. エレンベルガー (Henri F. Ellenberger) は、ショーペンハウアーにおける盲目的な人間の「意志」を「一部のロマン主義者が考えた無意識と同等のもの」(エレンベルガー 247) であると述べている。
- 7 メルヴィルが後年ショーペンハウアーに強い感銘を受けるに至る素地があったことがわかる。オリヴ L. ファイトの弁によれば、メルヴィルは晩年、『ビリー・バッド』(*Billy Budd, Sailor*, 1924) 執筆中にショーペンハウアーの著作を読み強い感銘をうけている (Fite 337)。
- 8 エレンベルガーは、ショーペンハウアーとフロイトにおける思想的共通点として「非合理主義的人間観、生命衝動一般と性本能の同一視、根本的な人類への悲観主義」(エレンベルガー 248) の三つを挙げている。「非合理主義的人間観」とは、人間を「未知の、ほとんど意識しない内面の諸勢力に誘導される」(エレンベルガー 247) 存在として捉えることを意味する。

主要参考文献

- 青山義孝。「盲壁の夢想——その1」。『甲南大学紀要 文学編 108』。1999年。1-21頁。
- 。『白鯨』における霊と魂と肉体」。国重純二編『アメリカ文学ミレニウム』。第1巻。南雲堂、2001年。224-46頁。
- Arvin, Newton. *Herman Melville*. Westport: Greenwood Press, 1972.
- パウマー, フランクリン・L。「ロマン主義 (1780年頃から1830年頃まで)」。フィリップ・P. ウィーナー編著『西洋思想大事典』。第4巻。荒川幾男他訳。平凡社、1990年。631-38頁。
- Bickman, Martin. "Melville and the mind." *A Companion to Melville Studies*. Ed. John Bryant. New York: Greenwood Press, 1986. 515-41頁。
- Bryant, John. "Moby-Dick as Revolution." *The Cambridge Companion to Herman Melville*. Ed. Robert S. Levine. Cambridge: Cambridge UP, 1998. 65-90頁。
- エレンベルガー, アンリ・F.『無意識の発見』。上。木村敏, 中井久夫監訳。弘文堂, 1980年。
- Fite, Olive L. "Billy Budd, Claggart, and Schopenhauer." *Nineteenth-Century Fiction*, 23, 1968. 336-43頁。

- Halverson, John. "The Shadow in Moby-Dick." *American Quarterly*, IX, 1963. 436-46 頁.
- Hawthorne, Nathaniel. "The Birthmark", in *Nathaniel Hawthorne's Tales*. Ed. James McIntosh. New York: W. W. Norton, 1987.
- Hoffman, Michael J. "The Anti-Transcendentalism of Moby-Dick." *The Georgia Review*, 23, 1969. 3-16 頁.
- 伊藤整. 『改訂 文学入門』. 講談社, 2004 年.
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*. Ed. Ezra Greenspan, Lindeth Vasey and John Worthen. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- McCarthy, Paul. *The Twisted Mind: Madness in Herman Melville's Fiction*. Iowa: U of Iowa P, 1990.
- Melville, Herman. *Moby-Dick; or the Whale*. Ed. Hershel Parker and Harrison Hayford. New York: W. W. Norton, 2002.
- Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. John Leonard. Harmondsworth: Penguin Classics, 2000.
- ショーペンハウアー, アルトゥル. 『意志と表象としての世界』. 西尾幹二訳. 『ショーペンハウアー』. 中央公論社, 1980 年.
- 新カトリック大事典編纂委員会編. 『新カトリック大事典』. 第 2 巻. 研究社, 1998 年.
- Stewart, Randall. *American Literature and Christian Doctrine*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1958.
- 寺田建比古. 『神の沈黙——ハーマン・メルヴィルの本質と作品』. 沖積舎, 昭和 57 年.
- The Holy Bible*. King James Version. New York: American Bible Society, n.d.
- Wenke, John. *Melville's Muse: Literary Creation and the Forms of Philosophical Fiction*. Kent: Kent State UP, 1995.

書けなかった死体解剖：
The Adventures of Tom Sawyer における Mark Twain の苦悩*

和 栗 了

SYNOPSIS

Mark Twain's father, John Marshall Clemens died in 1847 and his body was possibly cut open by doctors, perhaps by Orville Grant and Hugh Meredith. It was dissection for medical purpose, not for autopsy. Samuel Clemens confessed it to Olivia Langdon before their marriage.

His body was dissected, since he was a very poor freethinker. Since he had fallen into poverty, the operation may have been part of a deal that allowed his family to continue living in the upper part of Dr. Grant's house. Dr. Grant might have dissected the body for the financial support of the Clemenses. The doctors wanted to dissect the body for their medical studies, and perhaps Jane Clemens reluctantly offered it to them.

Olivia Langdon came to know the fact, at latest, by May 17th, 1869, when Samuel Clemens wrote a letter to her, which tells of his fear of illness, death, and "dissection by the doctors!" In this letter Clemens wrote about the dissection out of the blue, and this sudden mention leads us to assume that Clemens had confessed it to Olivia Langdon before this letter. Furthermore, through Sam's using "the doctors," not "doctors," she was able to identify who *the* doctors were.

Olivia's knowledge of the dissection led her to delete Jim's "Ghost" story from Chapter Nine of *Adventures of Huckleberry Finn*, and to obscure Injun Joe's identity as a resurrectionist in *The Adventures of Tom Sawyer*. Twain attempted to write about dissection, for example, the dissecting rooms in *The Gilded Age*, the trader of human bodies in "The Facts Concerning the Recent Carnival of Crime in Connecticut" (1876), and the grave-robbing Dr. Robinson in *The Adventures of Tom Sawyer*. But he never gave a full description of dissection, partly because of Olivia Clemens's "edition" and partly because of the anguish that the dissection of his father's body for money caused Twain.

Twain tried repeatedly sublimating the memory of his father's death into literature, but it was all in vain. Twain could never cut himself away from his childhood memories. In the years after his wife's death, Twain returned to his boyhood days in the stories like,

“Villagers of 1840-3,” and “Jane Lampton Clemens.” As one example of trying to confront the pain of his earlier memories, in the “Villagers of 1840-3” Twain made only an obscure confession in a segment called “*The autopsy.*” His boyhood memories, especially painful ones, obsessed him all his life.

Mark Twain (1835-1910、本名 Samuel Langhorne Clemens)は死体解剖を生涯に一度も書かなかった。より正確には、生前出版された作品の中で死体解剖の場面は描かれていないし、作品の中で死体解剖は実現していない。死体好きの Twain、大衆の残虐趣味を十分理解していた Twain が、医学用死体の非合法売買が横行していた時代に死体解剖を作品化しなかったことは不思議だ。

Philip Fanning は *Mark Twain and Orion Clemens* の中で、Twain の父親 John Marshall Clemens (1798-1847、以後 John Clemens と略す)の死体解剖の理由を推測している。¹ Fanning に対する反論は別のところで試みるとして、ここでは死体解剖を書こうとして書けなかった Twain の苦悩を追う。死体好きで残酷な場面を多々描いた Twain だが、彼は死体解剖を書かなかった。いや Twain は何度も書こうとしながら書けなかった、その葛藤の根底には父親の死体解剖による衝撃があったのではないか。書くことで忌まわしい記憶を昇華する、などという論理が成り立つのかどうか不明だが、Twain は最期まで父親の死体解剖を告白することも作品中に死体解剖を書くことも出来なかった。経済的困窮に陥った非キリスト教徒であったために父親は解剖された、言い換えれば、金のために父親の死体が売られたことによる衝撃を Twain は生涯払拭できなかったようだ。死体解剖は Twain の生涯にわたる強迫観念と言ってよい。ここでは *The Adventures of Tom Sawyer* (1876、以後 *Tom Sawyer* と略す)を中心に Twain の苦闘の軌跡を追う。

1

Twain が最初に死体解剖に関することを書いたのは 1869 年 5 月 17 日付の Olivia Langdon 宛の手紙である。² 彼は将来の妻に病気の恐怖と死体解剖の危惧を次のように語っている：

It seems almost a misfortune that it I wasn't dangerously sick, so that I might see the dear face again. I used to think of sickness with dread—for I always had visions of dreary hospitals—solitude—shut out from friends & the ~~was~~ great

world—dragging, uneventful minutes, hours, weeks—hated faces of hired nurses and harsh physicians—& then an unmourning death, a dog's burial, and—dissection by the doctors! But with you at the bedside—it seems to me that sickness would be luxury! You are a noble, true-hearted little darling, Livy. And I love you. (MTL3 239)

「あなたに看病してもらいたい」と求愛するところや死への恐怖は恋文として納得できても、死体解剖への恐怖は唐突な発想であり、簡単には読み過ぎせない話題だ。そして「嘆かれることのない死」(“an unmourning death”)や「惨めな埋葬」(“a dog's burial”)や「医師たちによる死体解剖」(“dissection by the doctors”)が、父親 John Clemens の死の場面を表現しているとしたら、父親の死は嘆かれることがなく、惨めな葬儀で、その理由は遺体が解剖されたからだ、と読むことができる。ちなみに“by the doctors”と複数形で定冠詞がついていることから、特定できる医師たちによって解剖がなされたことになる。とすれば、父親の解剖を執刀したのは Clemens 家が間借りをし、かつ懇意の医師 Orville Grant 医師と家庭医 Hugh Meredith 医師の兩人に違いない。

作品の中で Twain は死体解剖に間接的に結びつく話を 3 例書いている。1 例目は、“dissect”という言葉で、これは *The Gilded Age* (1873) で、「解剖教室」(dissecting room)として何度も使われている。この小説の中では、Ruth Bolton が医学を学び、女性医師として自立しようとする。このため「解剖」という言葉が何度も使われるが、Ruth という女性は共作者の Charles Dudley Warner が創造した人物の可能性が高く、Twain の苦悩を表現しているとは断定しにくい。むしろ当時注目され始めた女子医学校を作品に取り入れることでこの作品の話題性を求めたと考えられる。2 例目として、“Invalid Story” (1882) が挙げられる。この物語の中心は死体の運搬の際の死臭である。死体の運搬と保存は死体解剖に不可欠の手順であった。そして、臭気は死体解剖に必ず付いて回った。3 例目としては、*Adventures of Huckleberry Finn* (1884、以後 *Huck Finn* と略す)に Peter Wilks の墓を暴く場面がある。Wilks 家の財産 6000 ドルの金貨が入った袋を Huck は Peter Wilks の棺の中に隠したのである。ここでも死体と金が結びついている。

ところで、*Huck Finn* のこの場面を象徴的に読み解けば、Huck は金と死体から逃亡したことになる。Twain の父親の死体がわずかな金のために解剖されたとすれば、そして Huck が Twain の実像をある程度反映しているとすれば、巨漢の Hines に手首をつかまれて墓地に連行される Huck は Twain 自身の姿と読める。雷の閃

光の中に浮かび上がる Peter Wilks の死体と金は、11歳の Twain が目撃した John Clemens の死体であり、解剖によって手に入った金だと解釈できる。さらに Huck が Hines の手を振り切って一目散に逃亡する姿は、金と死体から逃げたいとする Twain の願望と読める。

Twain が作品の中で死体解剖に直結する話を書いた例は 5 例ある。年代順に列挙すると、*Roughing It* (1872) の 57 章の Sandwich 諸島の王の死体解剖の習慣、“The Facts Concerning The Recent Carnival of Crime in Connecticut” (1876、以後“Carnival”と略す)の死体売買、*Tom Sawyer* における死体盗掘事件、さらに“Jim’s Ghost Story”と“Villagers of 1840-3”における死体解剖である。³ このうち、生前に出版されたのは *Roughing It* と“Carnival”と *Tom Sawyer* だけである。1876年の夏に書かれた“Jim’s Ghost Story”は *Huck Finn* から削除され (*Huck* 531)、“Villagers of 1840-3”は覚書程度のものであり、ともに出版されなかった。だとすると、Twain は 1876 年頃まで死体解剖を書こうと試みたが、ついに書けず、“Carnival”と *Tom Sawyer* として出版した。その後 30 年もの時間を置いて、最晩年になってもう一度死体解剖を書こうとした、と推論できる。

上にも書いたように、Twain は好んで死体を描いた。“The Story of the Good Little Boy” (1870)の善良な主人公 Jacob Blivens はニトログリセリンの爆発に巻き込まれ、肉片となって飛散する。*Tom Sawyer* では、Dr. Robinson が Injun Joe に刺殺され、Injun Joe 自身も洞窟で餓死している。*Huck Finn* でも、Colonel Sherburn が酔っ払いの Boggs を銃殺し、Buck Grangerford も Shepherdson 家との私闘の中で死亡する。Pap Finn は背後から銃で撃たれていた。

一作品としてはたぶんアメリカ文学史上最多数の死体が登場する *A Connecticut Yankee in King Arthur’s Court* (1889、以後 *Yankee* と略す) では随所に死体が登場し、物語の最後、“The Battle of the Sand Belt”では 25000 人の死体が積み重ねられている。そしてそれらは強烈な死臭を放ち、Hank Morgan の部下達を死に至らしめる。死体損壊の例としては、*The Prince and the Pauper* (1882) で、Anne Askew と彼女の同調者、さらに Baptist の女性達が火あぶりになっている。*Yankee* では奴隷の女性が、そして *Personal Recollections of Joan of Arc* (1896)ではジャンヌ・ダルク自身が火刑になっている。Twain の作品に描かれる死体はどれも尋常ではない。

Twain が死体や無残な死の場面を繰り返し描いた理由は、個人的な趣味であると同時に読者大衆の趣向を察知したものだ。Twain は母親宛の手紙で、“I have just received your letter with the murder in it—haven’t read the letter—it is midnight & I

shall go to bed in a minute & read it there. I like murders—especially when I can read them in bed & smoke.” (To Jane Lampton Clemens, 4 November 1868, *MTL2*, 277-8) と書いている。Twain にとって読者としての母親の影響力は大きく、結婚する頃までの Twain にとって Jane Clemens は読者の代表であった。彼女の好みに合わせるように Twain は火災や殺人等を好んで書いた。そして彼の新聞記事が評判になったのである。残虐趣味は Twain のものであり、大衆のものである。

これだけ残虐な死を描き、大量の死体を作品中で生産した Twain が死体解剖を作品化しなかったのは、やはり不思議だ。Twain は残酷な場面や無残な人の死を多々書いたし、書くことができた。だが、何らかの理由で死体解剖を書くことはできなかったようだ。

2

Twain は死体解剖を書こうとしながらも書けなかった、その苦悩を *Tom Sawyer* の中で表現していると解釈できる。なぜなら、この作品中では、死体解剖が妨害され、無視され、さらに Injun Joe の死体盗掘に疑問が付きまとうからである。

まず、死体解剖は Dr. Robinson 殺害事件によって頓挫した。Dr. Robinson は Injun Joe に死体の盗掘を依頼し、金銭面で争い、Injun Joe に殺害される。そのため、死体解剖は実現せず、Twain は死体解剖を書こうとしながらも書けなかったとしか考えられない。ただし、単なる頓挫ではなく新たな殺人事件の発生による死体解剖の中断である。死体を書きたい、緊張感ある物語を展開したいとする願望は満たされているのだろうが、解剖の問題は解決されていない。

次に、死体解剖は、作品中の子供たちに無視されている。Tom Sawyer が通う学校の Dobbins 先生が机の中に忍ばせていた本は「何とか教授」が書いた『人体解剖』であった。この本の人体解剖図を Becky Thatcher が破るのである。しかもベッキーはその書名を見てもそれが何の本か分からずに破るのである：

The title-page—Professor somebody’s “Anatomy”—carried no information to her mind; so she began to turn the leaves. She came at once upon a handsomely engraved and colored frontispiece—a human figure, stark naked. At that moment a shadow fell on the page and Tom Sawyer stepped in at the door, and caught a glimpse of the picture. Becky snatched at the book to close it, and had the hard luck to tear the pictured page half down the middle. (*Tom Sawyer*, Ch. 20, 148)

ここでも解剖はそこに存在しながらも完全に無視されている。Twain は作品中で人体解剖を実現できなかったのである。

さらに、Injun Joe の死体盗掘事件に関しても3つの疑問が残る。そしてそのすべては、Twain が死体解剖を書きたいと思いつきながら書けなかったと解釈することを示唆している。疑問の第1は、Twain が混血の Injun Joe を悪魔的人物として描くことは奇妙である。Charles Brockden Brown とは異なり、Twain は先住民に対する白人の偏見を描くことはあっても、先住民を残酷な復讐鬼として創造したことはない。Injun Joe が唯一の例外である。2番目の疑問は、Tom Sawyer は洞窟から抜け出されたのに、洞窟を自らの巣窟としてきた Injun Joe が脱出できずに餓死したというのは納得できない。強烈な印象を与える Injun Joe を自らの洞窟で餓死させるという苛烈な運命を Twain は何故か彼に与えた。銃殺されるのではなく、火刑に処せられるのではない。餓死は最も長時間にわたって死の苦しみと対峙せねばならない。だからこそ Injun Joe は蝙蝠さえ取って食した。疑問の第3として、Dr. Robinson はなぜ殺されねばならないのか。彼は田舎町の医師としては研究熱心な立派な人物であるはずなのに、なぜ刺殺されなければならないのか。彼は死体泥棒を犯してまで、医学を究めたいと考えた。もちろん、何らかの罰は与えられたとしても、死は重すぎる。Dr. Robinson 以外に Twain の作品で他に医師が殺害された例がなく、しかも *Huck Finn* の物語の最後で Tom Sawyer を治療する医師のように、他の Twain の作品では医師は善人として描かれている。つまり Dr. Robinson の殺害は Twain の作品中異例なのである。

Tom Sawyer を書く段階で Twain は死体解剖に係った人々を葬り去りたかったのである。まず死体解剖の主犯 Dr. Robinson を死に至らしめ、その実行犯 Injun Joe を餓死させた。共謀した Muff Potter には牢獄とリンチの恐怖を与えた。Twain は、社会的タブーだから死体解剖を書けなかったということではなく、解剖に係った人々を憎悪し、作品の中で恨みを晴らそうとしたようだ。そして死体解剖は無かった、行われなかったと信じたかったのだ。だから Dobbins 先生が秘蔵する『人体解剖』という本は Becky Thatcher にとって何の本か判らないままに破られねばならなかったのである。

Twain は最晩年になって、“Jane Lampton Clemens”や“Tom Sawyer’s Conspiracy”などの回顧的作品をいくつも書いた。その中の“Villagers of 1840-3”で、Twain は父親の死の直後に“*The autopsy*”とだけ記した：

Judge C. was elected County Judge by a great majority in '49, and at last saw great prosperity before him. But of course caught his death the first day he opened court. He went home with pneumonia, 12 miles, horseback, winter—and in a fortnight was dead. First instance of affection: Discovering that he was dying, chose his daughter from among the weepers, who were kneeling about the room and crying—and motioned her to come to him. Drew her down to him, with his arms about her neck, kissed her (for the first time, no doubt,) and said “Let me die”—and sunk back and the death rattle came. Ten minutes before, the Pres. preacher had said, “Do you believed on the Lord Jesus Christ, and that through his blood only you can be saved?” “I do.” Then the preacher prayed over him and recommended him. He did not say good-bye to wife, or to any but his daughter. *The autopsy. (Huck Finn and Tom Sawyer Among the Indians, 104-5)*

1870年代、特に76年にTwainは死体解剖を書こうとした。“Jim’s Ghost Story”のようにその試みが作品化されることはなく、最晩年になって再度試みられたと推測できる。Twainにとって父親の死体解剖は忘れることのできない強烈な記憶だったのである。

ところで、この作品では父親はキリスト教に帰依して死んだことになっている。この記述は、父親がキリスト教徒だったとTwainが信じたかったことを示している。これを裏返して読み、父親はキリスト教徒でなかったとすれば、Twainは父親が非キリスト教徒であったがゆえに解剖されたことを自らの最期まで告白できなかったことになる。さらに言えば、TwainはC判事の死体が「解剖された」とも「解剖されなかった」とも書いていない。Clemens判事でもなく、解剖された、でもない、曖昧な表現にTwainの苦悩を読むことができる。

Twainは死体解剖された父親を最期まで認められなかった。宗教に関するTwainの苦悩は、聖書に立脚する社会道徳に従わなければ地獄に堕ちるとする倫理観や、キリスト教教会と白人キリスト教徒を厳しく批判する形となって表現されている。その根底には、生きるためには父親の死体も売らねばならなかったという衝撃と、神を信じていないという理由で解剖を認めたキリスト教教会への不信感があつたとも解釈できる。

母親に比べ、父親がTwainの作品に与えた影響は少ないと考えられてきた。母親のことは別の機会に論ずるとして、父親も大きな影響を与えていた。その一つは、金のために肉体を売ったという衝撃であり、もう一つは貧困な非キリスト教

徒の死体は解剖されるという恐怖感であった。

Twain が誰にも明かすことの出来なかった秘密、つまり非キリスト教徒の父親の死体が金のために解剖されたという事実は、彼の作品においても生涯においても甚大な影響を与えたのである。

3

Twain は Olivia Langdon に自身の父親の死体解剖の件を告白していたと考えられる。そして、Olivia Clemens は死体解剖の作品化に反対した可能性が高い。先に引用した69年の Olivia Langdon 宛の手紙が唐突に“dissection by the doctors!”と書いていることから、これより前の段階で既に解剖の話題が二人の間に交わされていたと推測される。そうでなければ、理解できないほどに突然の死体解剖の話題提供である。また、彼女が知らなかったとすれば、これに続く彼女宛の手紙で Twain はこの話題を説明する必要が生じたはずである。ところが、Twain はその後、人体解剖の話題を手紙に書いていない。さらに、“dissection by the doctors!”の最後の感嘆符はこの語句が特別重大なものであることを示している。医師による解剖は特別の話題だったのだ。

二人の間では“dissection by the doctors!”と表現すればどれだけの重層的意味を持つかも了解済みだったのである。先に特定できる医師達によって解剖されたと書いたが、手紙という情報伝達手段の性質上、医師達を特定できたのは Twain と Olivia Langdon である。恋文は極めて私的な通信である以上、第三者に読まれることを想定してはいない。書き手と受け手だけが“the doctors”を特定できたのだ。つまり、彼女は義父 John Clemens の死体解剖を結婚以前に知っていたのである。そうすると先に引用した手紙は Twain の心の奥深くにある傷を曝け出して求愛した手紙だと読める。

先にも書いたが、Twain は 1876 年前後に死体解剖に関することを書き、*Huck Finn* ではもっと直接的に書こうとした、と推論できると主張した。だが、“Jim’s Ghost Story”は削除された。その原因は Twain の家族、特に Olivia Clemens が反対したからである (*Huck* 531)。Twain は書こうとしたことを必ずしも書けなかった、その理由は Twain の内的なものであると同時に、Olivia という外的なものでもあった。

Twain は父親の死体解剖の衝撃を作品中に表現することで清算しようと考えたかも知れない。だが Olivia Clemens の反対によってその試行も願望も頓挫した。

だからといって Twain は死体解剖を書くのを諦めなかった。その後、Twain は死体損壊という形で死体解剖を書いた。損壊された死体が解剖にむかないことは十分知っていた。

死体損壊と述べたが、これは死体泥棒から遺体を守る有効な手段であった。というのは、医学用の死体には新鮮で損傷のない死体が求められたからである。この点からみると、Twain の作品に登場する死体の多くは医学用には適さないものだ。Twain が書くのは、銃で撃たれた死体、ナイフで刺殺された死体、ダイナマイトでバラバラに爆破されたもの、腐乱し死臭を放つもの、などである。Twain が書いたものの中で新鮮で完全な死体は、“The Death of Jean” (1911)の中の娘の Jean Clemens (1880-1909)くらいだろう。なお、彼女の死体は彼女の犬と Twain 自身が二日間にわたって家の中に安置し、監視していた。解剖用には適さない状態になってから埋葬されたことになる。つまり、Twain の描く死体は検死解剖の対象にはなっても医学用の解剖の対象にはなりにくかったと考えられる。

死体の状態という点から見ると Injun Joe の死体は解剖には理想的な状態だとと言える。というのは内臓に何も無く、冷たい洞窟の中で保存された無傷の死体なのだから。さらに、先住民やアフリカ系アメリカ人の死体が解剖されることが多かったことを考慮すれば、Injun Joe の死体こそ解剖されたはずである。1840年代の Hannibal に複数の医師が住み、St. Petersburg が Hannibal を模していることを考えれば、St. Petersburg に Dr. Robinson 以外の医師がいてもよい。Injun Joe の死体を解剖する医師は、Dr. Robinson の死後も St. Petersburg にいた可能性がある。Injun Joe の死体が解剖されたかどうか分からない。だがその可能性を残しているところに、Twain の死体解剖に対する嫌悪の根深さを読み取ることができる。

損壊されていない新鮮な女性の死体は男性のものよりも高価であった。死体解剖は絵に写し取られることが多く、この点で医学的なものではあったが、性的な意味も持っていたのである。Dobbins 先生が『人体解剖』を隠し持っていた理由は性的な意味もあるのだ。ついでに言えば、Becky Thatcher が破ったのは、性別は特定できないが、人体解剖図だった。この解剖図が女性であれば Dobbins 先生にとって、男性であれば Becky Thatcher にとって、それぞれに性的な意味を持つことになる。

Olivia Langdon と出会ってから特に女性を神聖視する傾向が強くなった Twain としては、女性の死体は解剖からも解剖図からも守られねばならなかった。あるいは損壊されねばならなかった。それも銃殺や腐乱や爆破による損壊ではなく、尊厳を保ったままでの損壊で無ければならない、と Twain は考えたに違いない。

少なくとも Twain が描くことのできる女性の死体は、Olivia Clemens がいる限り、尊厳を保ったものでなければならなかった。女性を崇拜し、Olivia を天使のように崇めた Twain は火刑によって聖女としての女性の死体を守ったのである。Twain が 1880 年代以降に女性の火刑を繰り返し描いたのは女性への嫌悪や怨念などではない。その死体が冒瀆されるのを防ぎたいとする信念、あるいは Olivia の要求のためだったのである。

だが、女性たちの火刑には別の意味もあると考えられる。火刑の残酷性と聖女としての死が結びついているのは Twain の葛藤を表現しているとも解釈できる。というのは、火刑になった死体は解剖される危険が無いとはいえ、あまりに残酷な刑罰だからである。

Twain が火刑を実際に見た可能性は少ない。だからといってその刑罰の残酷性を Twain が理解していなかったとは言えない。Terrell Dempsey によると、1836 年 4 月に St. Louis でアフリカ系アメリカ人の自由人 Francis McIntosh が白人暴徒たちの手によって火刑にされた (Dempsey 27-28)。この人物の危険性や白人暴徒たちの正当性、さらに McIntosh の苦痛に満ちた形相や苦しみのない死を望んだこと、などを Twain は同じ州内の事件として伝え聞いていたことだろう。もちろん聞いていなくとも火刑の残酷なことは理解できる。いずれにせよ、Twain は火刑の残酷性を十分理解しながら作品中で女性たちを繰り返し処刑した。死体解剖を書くことで心のわだかまりを吐露したい、しかし内的理由によっても、Olivia の意見によっても書けない、女性の死を書きたいがその肉体は守らねばならない、このような葛藤の中から女性の火刑が表現として選択されたと言える。

Twain が自分の父親の死体解剖の件を妻の Olivia Clemens に打ち明けており、そして Olivia Clemens が死体解剖の作品化に反対していた以上、死体損壊、特に女性の火刑は解剖を書こうとして書けなかった苦悩だけでなく、Olivia Clemens への揶揄とも解釈できる。あるいは、Twain の作品で繰り返される女性の火刑の場面は、死体解剖を書けないことに対する代償と読むことができる。

言うまでもなく Olivia Clemens は Mark Twain を「編集」した。だが、その「編集」を掻い潜るように、Twain は女性の火刑を繰り返し書いた。死体解剖に反対した Olivia Clemens が女性の火刑を認めた理由は推測の域を出ない。とはいつても、聖人に列せられたジャンヌ・ダルクのように、Twain の描く火刑のほとんどが宗教的被迫害者である時、火刑は残酷な見世物としての刑罰以上の意味を持つ。Twain は Olivia Clemens に、「自分は聖女を描いているのだ、自己の暗い部分を書いているのではない」と主張できたはずだ。死体表現をめぐるこの二人の緊張関

係を想像すると面白い。もちろん Twain が上手だった。女性たちの火刑は Twain が書きたいことを表現するための手段であり、Olivia Clemens の「編集」に対する抵抗だったのである。Twain は間違いなく Olivia を心の底から愛した。だがそれ以上に書かなければならないことがあったのである。

Twain は死体解剖を書き続けた。1870年代半ばまでは具体的な死体解剖を書こうと試みた。事情を知る Olivia Clemens の「編集」のために、その後は女性たちの火刑という形で死体解剖を書いた。書こうとする衝動の根底には、Twain が残酷な情景描写が好きだったことがある。もう一つは、父親の死体解剖のことを明らかにしたいとする感情だった。妻 Olivia Clemens の「編集」をすり抜けて、死体を書いた。だが、その結果、彼の中で苦悩が昇華されたとは考えられない。Twain はどんなに死体解剖を書いても納得できなかったのである。だからこそ晩年に至っても“Villagers of 1842-3”という原稿をしたため続けた。

だとすれば、父親 John Clemens の死体解剖事件は、その事実を書くか書かないかという作家としての問題から、「編集者」Olivia Clemens との緊張関係という問題を経て、死の直前までこの事実を書こうとした Twain の作家としての執念を見せてくれる。Twain にとって父親の死体解剖問題は生涯に渡る大きなテーマだったのである。

注

*この論文は甲南英文学会第24回総会・研究発表会（於甲南大学、2008年6月28日）で「John Marshall Clemens の死体解剖の理由は？：Mark Twain と父親」と題した研究発表原稿に大幅に加筆訂正を施したものである。

1 Fanning は、John Clemens が性病に罹っていたので解剖されたと推論している。下剤として服用される塩化第一水銀（カンコウ、calomel）を父親が服用していたこと、死亡時に肺炎以外の病気にも罹っていた可能性が高いこと、晩年には倦怠感を訴え、働けないと漏らしていたこと、などを根拠として、父親は梅毒に罹っていたと推論している。そして、Twain の母親 Jane Clemens が検死解剖を医師に求めた、と主張している。その結果、梅毒だと判明し、Twain もその事実をどこかで知ったのだ、と推定する。

2 結婚前は Olivia Langdon、結婚後は Olivia Clemens、どちらも含む場合には Olivia と表記する。

3 厳密には、Jim's “Ghost” Story だが、理解しやすいように、“Jim's Ghost Story”と表記する。

引用参考文献

- Brown, Charles Brockden. *Three Gothic Novels: Wieland Or the Transformation: Arthur Mervyn Or Memoirs of the Year 1793: Edgar Huntly Or, Memoirs of a Sleep-Walker*. (Library of America).
- Fanning, Philip. *Mark Twain and Orion Clemens: Brothers, Partners, Strangers*. Tuscaloosa and London: The University of Alabama Press, 2003.
- Fido, Martin. *Bodysnatchers: A History of the Resurrectionists*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1988.
- Hogarth, William. "Four Stages of Cruelty" *Engravings by Hogarth*. New York: Dover Publications, 1973.
- Iseron, Kenneth V. *Death to Dust: What Happens to Dead Bodies?* (Second Edition) Tucson, Arizona: Galen Press, 1994.
- MacDonald, Helen. *Human Remains: Dissection and Its Histories*. New Haven: Yale University Press, 2005.
- Mark Twain. (Clemens, Samuel Langhorne) *Adventures of Huckleberry Finn*. Berkeley: University of California Press, 2003.
- . *The Adventures of Tom Sawyer*. Berkeley: University of California Press, 1982.
- . *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. Berkeley: University of California Press, 1979.
- . *The Gilded Age*. (two volumes, 1922) 東京: 本の友社, 1988.
- . *Huck Finn and Tom Sawyer Among Indians and Other Unfinished Stories*. Berkeley: University of California Press, 1989.
- . *Early Tales and Sketches, Volume : 1851-1864*. Edgar Marquess Branch and Robert H. Hirst, eds. Berkeley: University of California Press, 1979.
- . *Mark Twain's Letters, Volume 2: 1867-1868*. Harriet Elinor Smith, and Richard Bucci eds. Berkeley: University of California Press, 1990. 本文中の引用箇所では *MTL2* と略す。
- . *Mark Twain's Letters, Volume 3: 1869*. Victor Fischer, and Michael B. Frank eds. Berkeley: University of California Press, 1992. 本文中の引用箇所では *MTL3* と略す。
- . *Personal Recollection of Joan of Arc*. (two volumes, 1899) 東京: 本の友社, 1988.
- . *The Prince and the Pauper*. Berkeley: University of California Press, 1979.
- Rifkin, Benjamin A., and Michael J. Ackerman. *Human Anatomy: {From the Renaissance to the Digital Age}*. New York: Harry N. Abrams, 2006.
- Willis, Resa. *Mark And Livy: The Love Story of Mark Twain And The Woman Who Almost Tamed Him*. New York: Atheneum Publishers, 1992.

Grammatical Metaphor as a Relative Scale of Nominalization

Kazukuni Sado

Synopsis

This paper deals with the issue of nominalization realized by gerund-participles. Having dismissed the traditional distinction between so-called gerund and present participle, we shall explore the roles they play in the grammar of English. Nominalization is one of the phenomena of grammatical metaphor, which is considered to be relative rather than absolute. We compare them with finite verbs and deverbal nouns and find out that gerund-participles share non-finiteness. We then classify the usages according to the degree of grammatical metaphor.

0. Introduction

This paper is intended as an investigation of the roles that the gerund-participle plays in the grammar of English in terms of nominalization. The term 'gerund-participle' was introduced by Huddleston and Pullum(2002:80), who believe it is impossible to draw a distinction between 'gerund' and 'present participle'.¹ In Sado(2008:63), I adopted this position and then discussed the difference between gerund-participles and deverbal nouns. Once we integrate traditional 'gerund' and 'present participle' as single grammatical phenomenon, it is worthwhile to investigate the range of roles it plays and clarify its realm in the grammar of English.²

1. On Grammatical Metaphor

The notion of grammatical metaphor was introduced into the systemic functional grammar by Halliday (1985). Thompson (2004:223) gives a provisional definition of it as "the expression of a meaning through a lexico-grammatical form that originally evolved to express a different kind of meaning". Nominalization is a typical example of grammatical metaphor. Bloor and Bloor (2004:199) describe it as "a process more congruently expressed as a verb is instead expressed as a noun". Their examples are *bath*,

thought, explanation and destruction, that were derived from *bathe, think, explain* and *destroy*. The former are processes realized as things. In the same way, qualities that are congruently realized as adjectives can be realized metaphorically as nouns such as *reality* and *loneliness* whose congruent forms are *real* and *lonely*. We must note, however, that the difference between congruent forms and metaphorical forms are not absolute. See an example from Halliday and Mathiessen (1999:230).

(1)The truest confirmation of the accuracy of our knowledge is the effectiveness of our actions.

This is a metaphorical example. They also show a congruent version of the example above.

(2)If we act effectively this most truly confirms that we know [things] accurately.

Note that they show an intermediate variant of this pair.

(3)The fact that our knowledge is accurate is most truly confirmed by the fact that our actions are effective.

They further indicate that “it would be possible to construct a number of intermediate steps”. We can agree with their observation that grammatical metaphor is gradient and not absolute or binary. In their words, “metaphor is a relative matter”. In the examples (1)-(3), (1) lies near the end of metaphorical while (2) lies near the end of congruent in the scale. (2) comes somewhere between them. There is no clear boundary between the two ends of the scale. The examples of nominalizations above are achieved by derivation. ‘confirmation’ and ‘knowledge’ are both deverbal nouns. Gerund-participle is a kind of inflection that involves nominalization. As we have seen in the examples above, nominalization is relative rather than absolute. But how metaphorical can a gerund-participle be in the scale? This is the theme we wish to explore in this article. The examples that I have taken from the Wordbank Online will help our exploration.

2. Gerund-participle as Predicator

Across various uses of gerund-participles, its common feature is that it is non-finite. This is true even if the clause that includes it is finite. See an example from Halliday and Mathiessen (2004:121).

(4) Sister Susie | 's | sewing | shirts | for soldier
 Subject Finite Predicator Complement Adjunct

Here, the whole clause is finite. Its verbal group is realized “’s sewing”. The first part of it is the Finite. “Sewing” is the Predicator, and it is non-finite just as the Predicator “stopped” in “My heart has stopped”. (Pearce2007:125) The examples below are from Wordbank Online.

- (5) There’s a lot of hard work and your muscles are developing all of the time.
- (6) Neighbour Isabella Liddle said: “He was just protecting his property.”
- (7) Network Two was, quite correctly, covering Ireland versus Mexico on the soccer front.
- (8) Each year, more and more learners of Gaelic are discovering an undreamed-of culture here within the British Isles.
- (9) Yes, I’m dismissing the Dubs challenge after poor performances in friendly games over the last few weeks.
- (10) They are still closing schools and hospitals, while raising taxes.

The clauses that contain gerund-participles are all finite and independent. Now see examples of finite dependent clauses.

- (11) Throughout childhood, as intelligence is developing, the brain may be exposed to risks such_as infection, trauma or poor nutrition
- (12) She’s anti-hunting, but pro-hanging, justifying it in_accordance_with the catechism: it is all_right to kill if you are protecting life.
- (13) When I was covering sport in the seventies and eighties one cherished dream sustained me throughout the tennis season.

- (14) While they were discovering politics and protest, Dylan was moving on, both musically and personally, toward more inward, mystical concerns.
- (15) She says it with a shrug as if dismissing him.
- (16) Women earn on average 20 per cent less than men, though the pay gap is closing.

The predicators in examples (5)-(16) are traditionally called 'present participles'. With 'be' as finite verbs, the whole verbal group express a progressive aspect. Halliday and Mathiessen(2004:179) treat gerund-participles in (5)-(16) as 'present in present'. When finite verbs and Predicators are separate, finite verbs have the primary tense and Predicators have the secondary tense. Whatever they are called, this kind of Predicators have dynamic and progressive meaning. One might doubt if this kind of Predicator have anything to do with nominalization. However, if these Predicators are compared with verbs that are both Finites and Predicators at the same time, we find an important difference: the verb is non-finite. Since nominalized verbs are all non-finite, the loss of finiteness is a first step toward nominalization. In addition to this, dependent clauses in (11)-(16) are agnate with participle clauses we shall see below. They are in turn agnate with prepositional phrases.

3. Non-finite Clauses

Clauses are classified into two types: finite and non-finite. It is generally agreed that non-finite clauses are realized by infinitives and participles. See examples from Huddleston and Pullum (2002:1174).

- (17) Max wanted [to change his name]
- (18) I remember [locking the door]
- (19) His father got [charged with man slaughter]

They label (17) as infinitive, (18) as gerund-participle, and (19) as past participle. Declerck(1991:448) notes that "the participle does not have all the morphological characteristics that are typical of lexical verbs". He points out that they cannot express person, number, mood, modality and tense. He further explains that "no participle form can be said to belong to the present tense or preterite". In our view it

is more appropriate to say that participles do not express primary tense. Along with these features Biber et al(1999:198) observe that “they frequently lack an explicit subject and subordinator”. In other words, subjects are optional unlike finite clauses. We shall see examples of gerund-participles in non-finite clauses and return to this point.

4. Participle Clause

The first group of examples is gerund-participles in participle clauses. Some writers prefer the term ‘supplementive clause’(Declerck(1991:456)) or ‘supplementary adverbial clause’(Morley 2004:135). Whatever the terms are, they refer to roughly the same thing. Declerck states that they occur in both initial and final positions as well as immediately after the subject nominal group of the main clause. Morley notes that they “express a secondary proposition, they present what might be described as an ideational prologue or epilogue, providing an addition, contrast or replacement”. The examples below are from Wordbank Onlie.

- (20) Dr Dique grew up in colonial India, developing a love of classical literature, history, painting and music.
- (21) He appears to be patrolling an awfully nice Regency Crescent in Bristol, protecting decent folk from the city’s yoof and their big bad crime wave.
- (22) Honda’s Legend is different altogether _ it relishes long highway runs, covering big distances effortlessly, quickly and quietly.
- (23) Two Swiss astronomers beat him to it, apparently discovering something large and unlikely positively hurtling around 51 Pegasus 51 Peg to its friends.
- (24) “Thank you,” he said, dismissing the young officer with a wave.
- (25) News Corp was lower all day, closing 9 cent cheaper at $ 8.06 while its preferred shares dipped 3 cent to $ 7.09.

All have participle clauses in the final position in the clause nexus. We have examples that have them in the initial positions. (26) is from Biber et al(1999:198) and (27) is from Quirk et al (1985:1121).

(26) Crossing, he lifted the rolled umbrella high and pointed to show cars, buses, speeding truck and cabs.

(27) Driving home after work, I accidentally went through a red light.

All the examples in (20)–(27) have no subjects. Note that some participle clauses do have subjects. (28)–(31) are from Wordbank Online

(28) Choice’s Chair, South London car dealer Howard Baugh, stated in the South London Press, the local newspaper covering the Choice FM transmission area, that we propose a station geared towards the interests of African-Caribbeans which will enhance their cultural backgrounds.

(29) The compression inevitable in the dramatic form has made some of these characters into stage-types, but even they are entertaining in their kind, Mr. Aubrey Dexter in particular giving a good sketch in the Belcher tradition, and Miss Jill Furse discovering a certain tension in the girl called Pheasant .

(30) Arter almost dismissing the call as a hoax, Jean Clark, of Larkhall, remembered she had put Lucky’s name on a raffle ticket and collected her

(31) Miguel felt sad as Firebug disappeared into the vestibule, the ugly steel door closing behind him with a clank.

(32) His mother being ill, Max had to withdraw from the expedition. (Huddleston and Pullum(2002:1191))

(33) No further discussion arising, the meeting was brought to a close. (Quirk et al (1985:1120))

(34) A little boy went past us, his scarf dragging behind him on the pavement. (Declerck (1991:462))

“The local newspaper” in(28), “Miss Jill Furse” in (29), “Arter” in (30), “the ugly steel door” in (31), “His mother” in (32), “No further discussion” in (33) and “his scarf” in (34) are all subjects of the non-finite gerund-participles. Non-finite clauses, including participle clauses, have optional subjects. A majority of participle clauses do not have subjects. According to Quirk et al’s(1985:1121) ‘attachment rule’, the missing subjects are “assumed to be identical in reference to the subject of the superordinate clause”. In Declerck’s(1991:456) words, “the non-lexical subject positions are controlled by the

subject of the higher clause". In other words if the subject of the participle is different from the one in the independent clause that the non-finite depends on, these gerund-participles as Predicators can have their own subjects. Nevertheless, all of these gerund-participles remain non-finite, which is evident from the fact that the subjects and the non-finite verbs do not meet in person and number and they have no primary tense, mood and modality. In spite of all these differences, examples (28)-(34) are agnate with finite dependent clauses. Let us clarify the agnate relationship. Finite dependent clauses are agnate with non-finite participle clauses with Subjects. This agnate relationship between finite and non-finite is crucial. On the other hand, in the examples in (20)-(25), subjects are controlled by main independent clauses. The participles in (20)-(25) share subjects with the main clause. They are agnate with finite dependent clauses whose subjects are the same as the one in the main finite independent clauses. The Subjects in participle clauses are required only when Predicators have different subjects from the main clauses. With or without Subjects, participle clauses are closely agnate with finite dependent clauses. We need to see another kind of participle clauses. They have prepositions in front of the participles. See examples from the Wordbank Online.

- (35) ` In developing black staff we have perhaps not applied ourselves as hard as we should.
- (36) Japanese carmakers have been successful in protecting their home market from those in the US and elsewhere, limiting imports into Japan to less than 5 per cent of the cars sold there.
- (37) Abelson's chapter (with a third attack on BASIC) provides an excellent guide to LOGO for beginners, by covering procedures, recursion and list-processing.
- (38) Ms Richardson and husband James Christiansen and their family restored the house of elegant lines and five bedrooms after discovering its hidden beauty behind enclosed verandas and boarded fireplaces.
- (39) Minutes earlier she had made a bizarre attempt to block the divorce by dismissing her lawyers.
- (40) THE Government's Defence Research Agency is cutting at least 1,950 jobs by closing more than a third of its 54 sites.

We can find prepositions "in", "by" and "after" in front of the gerund-participles. Since

these participles are complements of prepositions, it is no doubt that they are partly nominalized. Those who wish to draw a distinction between traditional 'gerund' and 'present participle' might consider them as borderline cases. They might regard the one without preposition such as in (20)-(27) as 'participle' while the one with preposition in (35)-(40) as 'gerund'. However, let us take examples from Huddleston and Pullum (2002:1222).

(41) On hearing his cry, she clashed into the garden.

(42) Hearing his cry, she dashed into the garden.

They suggest that these two have "no systematic difference in aspectual meaning". While it is true that "hearing" in (41) is a complement of preposition "on", it seems pointless to discuss if they are 'gerund' or 'present participle'. "On" is a subordinator that explicitly expresses temporal relationship.

Let us return to the example (15). We classified this example as having a gerund-participle as a Predicator in a finite dependent clause. In this kind of analysis, Subject and Finite are supposed to be omitted. It is however, possible to treat this as an example of participle clause with "as if" as a subordinator. Here, the distinction between prepositions and conjunctions is not important. Note that in the example (38), "after" can be analyzed either way. Whatever we call it, their function as subordinators is important. Unnecessary distinction between preposition and conjunction will bring nothing but complication.

5. Deverbal Nouns

These are examples of deverbal nouns from Wordbank online. They are all complements of prepositions.

(43) Although it is not known for sure it Vitamin E affects bird fertility, it certainly contributes towards the development of a chic into a healthy adult.

(44) Finally, fearing for her baby's life, she fled to the protection of the YWCA.

- (45) But when you are exposed to the same fashions by media coverage and constantly told that this is now the latest in fashion trends, you start to become accustomed to the old/new look.
- (46) With the discovery of bauxite at Weipa in 1955, the company played a leading part in the development of the aluminium industry in Australia.
- (47) But Australian soccer's heartbreak team had to do it the hard way after they were reduced to 10 men in the 13th minute with the dismissal of star midfielder Danny Tiatto.
- (48) After the closure of the choir school, Ridout joined the music staff at King's College, Canterbury.

Here, they do not constitute separate clauses. They are only prepositional phrases functioning as Adjuncts in the clause. The nouns have derived from verbs by adding suffixes: -ment, -ion, -age, -ure. The process is highly nominalized in deverbal nouns than in gerund participles. These are agnate with participle clauses that have prepositions as subordinators. In Sado(2008:63) I have noted that the former is part of the clause while the latter forms a non-finite clause. When the process is nominalized by derivational affixes, they no longer constitute a whole clause. The whole figure is instead metaphorically realized as a phrase, rather than as a clause. Having observed examples in dependent clauses, we need to place gerund-participle in the scale of grammatical metaphor.

6. Degree of Nominalization as Grammatical Metaphor

We have seen examples of gerund-participles whose clausal status vary from finite independent to non-finite dependent ones introduced by prepositions. We have also seen examples of deverbal nouns. As we noted earlier, grammatical metaphor is a relative rather than an absolute matter. Some expressions are more metaphorical than others. As Halliday and Mathiessen(1999:256) point out, there is no end point on either side of the metaphorical scale. If we believe some expression to be the ultimate congruent form, this may be proved to be wrong by the discovery of more congruent expressions. The same goes for metaphorical expressions. All we can say in this article is that some expressions in our examples are more metaphorical than others. In this respect locating a

gerund-participle in the scale of grammatical metaphor may be far from complete, but this will give an interesting insight into the degree of nominalization. Therefore the most congruent in our examples are Predicators in finite independent clauses. Participle clauses with Subjects are more metaphorical than these Predicators. Participle clauses without subjects are more metaphorical than those with Subjects. Participle clauses with prepositions are more metaphorical than those without it. Since they are complements of prepositions, they are highly nominalized but yet not so much as deverbal nouns. It must be noted, however, that deverbal nouns have not completely lost their verbal nature. It is rather a “junction of features”, to use Halliday and Mathiessen’s(1999:273) terms. They combine the category meanings of verb and noun. What all the examples of grammatical metaphor have in common is non-finiteness. It is clear that gerund-participles are metaphorical form of finite verbs. Degree of metaphor and nominalization vary depending on the place they appear in the clause.

7. Conclusion

We can summarize the degree of nominalization from the perspective of clause structure as follows:

- (i) process as a fusion of Finite and Predicator in the finite independent clause. This does not have –ing suffix or conjugate according to person, number, and tense
- (ii) process in the finite clause. In examples (5)-(10) the participles are in independent clauses while those in (11)-(16) are in dependent clauses.
- (iii) participle clause with Subject: examples (28)-(34)
- (iv) participle clause without Subject: examples (20)-(27)
- (v) participle clause introduced by prepositions: examples (35)-(40)
- (vi) deverbal noun as complement of preposition: examples (43)-(48)

(i) is the most congruent form in our research while (v) is the most metaphorical. (ii)-(iv) are all gerund participles. Only (i) is finite, all others are non-finite. (i)-(v) form clauses, but only (vi) does not. The status of non-finite clause is what all the examples of gerund-participle share. We have seen that there is a degree of nominalization even among gerund-participles. (ii) is close to the finite verb, while (v) is close to the noun. We

focused on gerund-participles in independent clauses in this paper. However, dependence is not the only instance of clausal relationship. Rankshifted clauses may be embedded in another clause:

(49) Protecting the information is the problem.

Here the embedded clause "Protecting the information" functions as Subject of the clause. The same goes for Complements:

(50) In becoming fit for survival, our biggest coup was developing the ability to store endless supplies of energy.

Rankshifted clauses can be embedded inside nominal groups as Qualifier, with or without prepositions. We may need to compare them with deverbal nouns that have the same functions. However, it may be problematic to place them in the scale of grammatical metaphor for dependent clauses since they involve different clausal relationship. We shall leave the discussion of embedded clause to another study in order to avoid unnecessary confusion. We could at least roughly observe the range of roles that the gerund-participle plays in the grammar of English.

Notes

- 1 Other writers like Biber et al(1999:67) have adopted the term "ing-participle" to refer to the same usage.
- 2 Among the examples in this article, 36 of them are from Wordbank Onlie through Shogakukan Corpus Network. I would like to express my gratitude to the Collins and Shogakukan for providing examples through the Internet.

References

- Adams, V. (1973) *An Introduction to Modern English Word - formation* Longman
- Araki, K. and Yasui, M. (eds) (1992) *Sanseido's New Dictionary of English Grammar* Sanseido
- Bauer, L. (1983) *English Word Formation* Cambridge University Press
- Biber, D., Johanson, S., Leech, G., Finegan, E. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English* Longman
- Bloor, T and Bloor, M. (2004) *The Functional Analysis of English* second edition Arnold

- Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English* Kaitakusha
- Gramley, G and Pätzold, K. (2004) *A Survey of Modern English* second edition Routledge
- Halliday, M.A.K. (1985 / 1994) *An Introduction to Functional Grammar* Arnold
- Halliday, M.A.K and Mathiessen, C.M.I.M. (1999) *Construing Experience Through Meaning* Continuum
- Halliday, M.A.K and Mathiessen C.M.I.M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar* third edition Arnold
- Huddleston, H and Pullum, G.K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language* Cambridge University Press
- Morley, G.D. (2000) *Syntax in Functional Grammar* Continuum
- Morley, G.D. (2004) *Explorations in Functional Syntax* Equinox Publishing Ltd
- Martin, J.R and Rose, D. (2007) *Working with Discourse* second edition Continuum
- Nishikawa, M. (2006) *Eigo Setsuji Kenkyu* Kaitakusha
- Pearce, M. (2007) *The Routledge Dictionary of English Language Studies* Routledge
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of English* Longman
- Plag, I. (2003) *Word - Formation in English* Cambridge University Press
- Sado, K. (2008) On the role of 'Gerunds' in clause combinations The Council of College English Teachers Research Reports No27
- Simon - Vandenberg, A. Taverniers, M. and Ravelli, L. (eds.) (2003) *Grammatical Metaphor* John Benjamins
- Thompson, G. (2004) *Introducing Functional Grammar* second edition Arnold

About Case Assignments to *That*-Clauses

Yuko Maki

SYNOPSIS

The distribution of CPs overlaps with that of NPs in some cases, where Case is assigned to both of them. In other cases, CPs appear in the positions where Case is not supposed to be assigned. However, it has been obscure how the different distribution of CPs is explained. The purpose of this paper is to distinguish the CPs in the former from those in the latter. Specifically, we propose that the CPs in Case-assigned positions are parts of DPs to which Case is assigned. For the CPs in non-Case-assigned positions, the structure is the same as what has been assumed in the literature, and Case cannot be assigned to them.

1. Introduction

NPs and CPs can appear in the same grammatical positions.

- (1) a. [That you study Chinese] is a good idea.
b. It is a good idea.
- (2) a. [That Mary moved to Tokyo] surprised us.
b. The news surprised us.
- (3) a. I believe [that John is a hypocrite].
b. I believe your words.
- (4) a. I know [that John was a teacher].
b. I know the truth.

In (1) and (2), both the NPs and the CPs are in the subject positions, and they are in the object positions in (3) and (4). They seem to have subject θ -roles and Nominative Cases in the former and object θ -roles and Accusative Cases in the latter. However, they do not always show the same distribution.

- (5) a. We were talking about John's trip to Germany.
 b. *We were talking about [that John went to Germany].
- (6) a. I consider Mike's return to be fortunate.
 b. *I consider [that Mike came home] to be fortunate.
- (7) a. Mary is afraid *(of) death.
 b. Mary is afraid [that she will die of cancer].
- (8) a. They refuted [the claim *(of) a petitioner].
 b. [The government's claim [that the recession is over]] is premature.

A NP can be the object of a preposition and an ECM verb as shown in (5a) and (6a) respectively, but a CP cannot as shown in (5b) and (6b) respectively. On the other hand, a CP can directly follow an adjective as in (7b), but a NP cannot as in (7a). In addition, a CP can directly follow a noun like *claim* as in (8b), but it is possible only if *of* is inserted between two NPs as in (8a).

Considering the examples which show the same distribution of NPs and CPs as in (1) to (4), we might want to assume that the same Case and θ -role are assigned to a NP and a CP if they are in the same grammatical positions. For example, both the noun phrase and the *that*-clause in (3) have to receive a θ -role of Theme and Accusative Case. In contrast, given the examples in (5)-(8), we are obliged to assume that Case is not assigned to a CP. For example, adjectives do not have Case assigning ability, so *of* has to be inserted before the NP in (7a). The direct sequence of the CP after *afraid* in (7b) will suggest that the CP should not require Case. In other words, the examples which show that NPs and CPs behave the same will imply that CPs as well as NPs have to follow the Case Filter.¹

(9) The Case Filter

*N, where N has no Case.

Some CPs have Case in fact. However, it depends on the positions where CPs appear. It seems obvious that the CP in a Case-assigned position has Case, given that the CP can be a subject in a passive sentence.

- (10) [That the pills were powerful] has been reported (by Paul). (Stowell 1981: 163)

Following the common assumption about the passivization that the Accusative Case of a verb is absorbed and the object is forced to move to the subject position to have Case, it will be a natural consequence to consider that CPs in Case-assigned positions require Case.

In this paper, I will pursue why such a contradiction occurs in CPs, and propose that the CP in a Case-assigned position forms an appositive relation with a *pro*, which is a silent pronoun. Specifically, what seems to be a CP in a Case-assigned position is actually a DP which has a CP as its complement in its structure. In section 2, we will see previous studies, especially Stowell (1981). In section 3, the structure of CPs in Case-assigned positions is shown based on the proposal by Rosenbaum (1967), and we will compare that with that of CPs in non-Case-assigned positions. Section 4 concludes this short paper.

2. Previous Studies

Stowell (1981) captures the fact that each A-chain functions as a unit with respect to the assignment of θ -roles as follows.

- (11) θ -roles can only be assigned to A-chains that are headed by a position occupied by PRO or Case. (Stowell 1981: 134)

In addition, Stowell (1981) supposes that Core grammar includes the following general principle.

(12) The Case-Resistance Principle (CRP)

Case may not be assigned to a category bearing a Case-assigning feature.

(ibid. : 146)

The principle in (12) predicts that Case cannot be assigned to a category bearing the feature [+tense]. Stowell (1981) suggests that the basic distinction between CPs and NPs is related to the [\pm tense] feature and that CPs have [+tense] features. It follows that Case can never be assigned to CPs. Then, why can the examples including CP subjects or CP

objects in (1)-(4) be grammatical? The Projection Principle in Chomsky (1981) will require that every θ -role that the verbs have be appropriately assigned to their arguments, including the CPs in (1)-(4). Considering (11), however, it is impossible because the CPs have [+ tense] features and Case can never be assigned to them. To tackle this problem, Stowell (1981) adopts the idea in Emonds (1976) that the tensed clauses in (1a) and (2a) are not really in the subject positions, but rather in the topic positions, and suggests that Nominative Case should be assigned to the trace of CP as shown in (13).

(13) [_{CP} That Jenny is a good hostess]_i [_e]_i is self-evident.

In (13), the trace of CP can have a subject θ -role because the trace, which is a member of A-chain, can receive Case. This explanation does not seem to raise a problem as far as we presuppose that traces are left as a result of movement. However, in the Minimalist Program advocated in Chomsky (1993) and elaborated in the subsequent works (Chomsky 1995 and Chomsky 2000 among others), it is assumed that copies, not traces, are left after movement. Specifically, every member in a chain has the same property. Then, how can CPs in Case-assigned positions receive Case if we assume that the principles (11) and (12) in Stowell (1981) are on the right track?

3. Proposal

3.1 The Structure

Rosenbaum (1967) proposes a deep structure to generate a subject extraposition example.²

- (14) a. [_{NP} [_{NP} it] [_S you came early]] surprised me.
 b. It surprised me that you came early.

According to his Extraposition Rule, the S in (14a) moves to the sentential final position. Not only in the subject position, but also in the object position, expletive *it* can appear as shown in (15).

(15) a. Christians today tend to take it for granted [that we can easily take that as....]

b. Rajiv found it frustrating [that his politics made little impact on poverty].

(Kim 2005: 150)

According to the analysis by Rosenbaum (1967), it will follow that *it* and a *that*-clause make a constituent in the base structure, and the *that*-clause moves to the sentential final position. Given that, let us suppose that the CP in a Case-assigned position has the structure in (16), which has exactly the same structure as the NP counterpart in (17).

(16) a. I know [_{DP} pro [_{CP} that John was a teacher]].

b. [_{DP} pro [_{CP} that John did his best]] is true.

(17) a. I know [_{DP} the truth].

b. [_{DP} John's effort] is true.

Both the object θ -role and Accusative Case are assigned to the DP in (16a), and both the subject θ -role and Nominative Case in (16b). We assume that *pro* is a silent form of a pronoun and that *pro* and a *that*-clause are in an appositive relation. It does not seem to be odd, given (18)-(25) in which pronouns appear not in a silent form but in a phonetic form, *it*. Note that nothing seems to intervene between the expletive and the *that*-clause apparently in examples below.

(18) Ms. Wang paid slightly more than half, but her husband, whose family had started the business, was never heard from again; rumor has it that he was killed on a boat in Hong Kong's waters and dumped overboard.

(The New York Times, January 14, 1996)

(19) No-one at the Woolwich will be interviewed but in a statement Woolwich has told us it that it still doesn't accept that Prime Gold is a superseded account.

(BBC News (live program), July 16, 2001)

(20) But some local people told me it that was a reaction to heavy-handed policing and the use of CS gas in the arrest of a Bangladeshi resident in front of his children last weekend.

(BBC NEWS, June 6, 2001)

(21) It was only because the Arab committee suggested it that the legislators have been chosen to do the negotiating.

(The New York Times, September 30, 1989)

(22) “.....While we were singing, for the first time, I let my mind think it - that this is where I was going to wind up.”

(The New York Times, May 14, 1988)

(23) “.....I believe it that it is essential to share best practice and hopefully inspire other people to take up the stewardship scheme and help protect the wildlife for many future generations to come.”

(News Distribution Service, London)

(24) “I am pro-choice because of my faith, and not in spite of it, and I resent it that our opponents like to create the impression that theirs is the only morality that counts.”

(The New York Times, August 8, 2005)

(25) “Sometimes, when you walk out on that field, you just know it, that you are going to beat your man today and that you are going to win.” Giants running back Greg Comella said.

(The New York Times, October 30, 2000)

When a DP head has a phonetic form *it* and the DP is in the subject position as in (14), we assume that the complement *that*-clause has to be extraposed.³ When a DP head has a silent form *pro* and nothing intervenes between the verb and the object DP as in (16a), it is natural to predict that the complement *that*-clause is not extraposed, because, as is well known, if a *wh*-phrase is included in the *that*-clause, the *wh*-phrase can move successive cyclically out of the *that*-clause.⁴ Once we assume that the complement *that*-clause has to be extraposed, it will remain unclear how the *wh*-phrase in the extraposed *that*-clause can be extracted from the adjoined position.⁵ Therefore, we assume that *that*-clauses are not extraposed from the DPs with a *pro* head as in (16).

3.2 The Contrast between CPs in Case-Assigned Positions and CPs in Non-Case-Assigned Positions

Let us recall the contrast between examples like (1) to (4), in which the same distribution of CPs as NPs was observed, and examples like (5) to (8), in which the

different distribution of CPs from NPs was observed. The structure of *that*-clause in the former examples was suggested in the section above. In this subsection, let us see what the structure of *that*-clause in the latter examples is like, and consider how the structure proposed above will work to differentiate between the CPs which appear the same. First of all, let us examine the adjectives followed by *that*-clauses.

- (26) a. They were anxious that you should return/*(for) your return.
 b. They were disappointed that you were unable to come/*(at) your inability to come.
 c. Are you sure/certain/confident (that) he's honest/*(of) his honesty?

Stowell (1981) poses a question why CPs after adjectives can have θ -roles although Case is not assigned to them. Considering (11) and (12), it is not allowed to assign θ -roles to the CPs preceded by adjectives. In (26), the NPs can follow the adjectives only if prepositions are inserted to assign Case to the NPs. This will indicate that adjectives do not carry Case with them. However, it seems obvious that adjectives assign θ -roles. Let us see the following examples from Stowell (1981).

- (27) a. I was surprised at [Mary's happiness that Charles is leaving].
 b. [Kevin's certainty that the tent is in the car] is not reassuring.
 c. [Bill's awareness that his mother was ill] was unfortunate.

(Stowell 1981: 205)

The nominal heads in (27) are derived from the adjective *happy*, *certain*, and *aware*. The relation between the derived nominal and its CP complement is the same as the one between the adjective and its CP complement in (26). These nominals do not have the identity relation with their complements.

- (28) a. *[Bill's happiness] is [that Charles was leaving].
 b. *[Bill's awareness] was [that his mother was ill].

(Stowell 1981: 206)

The ungrammaticality of (28) implies that certain θ -roles are given to the CP complements not only from the derived nominals in (27), but also from the adjectives in

(26). Stowell (1981) calls the adjectives as in (26) psychological-state-denoting adjectives, and argues that they have special properties that make them immune from the general requirement that θ -roles can only be assigned to A-chains in (11). In addition, it is proposed that a special case of θ -role assignment should be permitted, which is limited to relations of the awareness or recognition of the propositional content of a complement clause. Furthermore, Stowell (1981) suggests that this special case of θ -role assignment is triggered by a special lexical property of the adjective [+R]. Therefore, the CPs preceded by psychological-state-denoting adjectives as in (26) can receive their θ -roles without any relation to Case assignment.

Then, let us see what the structure of a CP which follows an adjective is like.

- (29) a. *They were anxious [_{DP} pro [_{CP} that you should return]].
 b. They were anxious [_{CP} that you should return].

If the structure is like (29a), the object DP cannot have Case, and the derivation will crash. On the other hand, if the structure is like (29b), the *that*-clause can appropriately receive its θ -role from *anxious* in terms of the special property of the adjective [+R]. Note again that the structure of *that*-clause in (29b) is different from that in (16) in that the former does not include *pro*, but the latter does. The contrast of the *that*-clause structures will be born out if we see the contrast below.

- (30) a. Paul already knows [that Jim lives with his sister].
 b. Jenny forgot to mention [that the water is bad].
 c. [That Jim lives with his sister]_i, Paul already knows [e]_j.
 d. [That the water is bad]_i, Jenny forgot to mention [e]_j.

(Stowell 1981: 159)

- (31) a. I believe that Mary is happy that Charles is leaving.
 b. I know that Neil is afraid that the computer will break down.
 c. *[That Charles is leaving], I believe that Mary is [happy ---].
 d. *[That the computer will break down], I know that Neil is [afraid---].

(Stowell 1981: 206)

In (30c, d), the verbs can properly govern the traces after the complement clauses are topicalized, but in (31c, d) the adjectives cannot properly govern the traces after the Topicalization, if we explain the contrast in terms of the Government and Binding Theory.

Next, let us consider the contrast in (8), which is repeated below.

- (8) a. They refuted [the claim *(of) [a petitioner]].
 b. [The government's claim [that the recession is over]] is premature.

In (8a), (9) is satisfied by inserting *of* before *a petitioner* because nouns do not have the Case assigning property. If we assume that the position following *claim* in (8b) is a Case-assigned position like (8a), the possible structure will be as in (32), with *of* inserted.

- (32) *_{[DP} The government's claim of [_{DP} pro [_{CP} that the recession is over]]] is premature.

But (32) is ungrammatical. Stowell (1981) suggests that Case should not be assigned to *that*-clauses preceded by derived nominals like (8b). Let us consider the examples below.

- (33) a. [Andrea's guess] was [that Bill was lying].
 b. [John's claim] was [that he would win].
 c. [Paul's explanation] was [that he was temporarily insane].

(Stowell 1981: 200)

The examples in (33) show that an identity relation holds between the derived nominals and the *that*-clauses, and that the relation is significantly different from that in the corresponding examples in which verbs are used instead of the derived nominals.

- (34) a. Andrea guessed that Bill was lying.
 b. John claimed that he would win.
 c. Paul explained that he was temporarily insane.

(Stowell 1981: 199)

In (34), the verbs refer to the action of guessing, claiming, and explaining, respectively,

and each verb assigns an object θ -role to the *that*-clause. On the other hand, the fact that an identity relation holds in (33) will imply that the *that*-clause in (8b) cannot receive a θ -role from *claim*. We suggest that the structure of (8b) should be (35), not (32).

(35) [_{DP} The government's claim [_{CP} that the recession is over]] is premature.

In (35), since the *that*-clause does not have a θ -role, it does not have to follow (11). Specifically, the position preceded by *claim* does not have to be a Case-assigned position. Therefore, the *that*-clause does not have to be selected by *pro*. Given this, we can account for the different distribution of the CP from the NP in (8); the NP cannot follow the derived nominal unless *of* is inserted, but the CP can directly follow it.

Lastly, we will return to (5) and (6), which might be a little problem to our proposal above. Let us see (5) again, and suppose that the structure of the *that*-clause in (5b) is as in (36).

- (5) a. We were talking about John's trip to Germany.
 b. *We were talking about [that John went to Germany].

(36) We were talking about [_{DP} *pro/it [_{CP} that John went to Germany]].

In (36), since the *that*-clause is supposed to receive a θ -role from *talk*, *about* is inserted to assign Case to the DP which includes the *that*-clause as its complement. However, if the head is *pro*, not *it*, then it will be ruled out. The example in (37) also indicates that if the phonetic form *it* is used instead of the silent form *pro*, it will be fine.

(37) I depend upon it that their paper will expose crooked politicians.

(Kim and Sag 2005)

Let us assume that the structure of the *that*-clause in (6b) is supposed to be as in (38).

- (6) a. I consider Mike's return to be fortunate.
 b. *I consider [that Mike came home] to be fortunate.

(38) *I consider [_{DP} pro/it [_{CP} that John came home]] to be fortunate.

The example in (38) is ungrammatical even if the phonetic form *it* is used as in (36). However, if the *that*-clause is extraposed as in (39), it becomes grammatical.

(39) I consider it to be fortunate that John came home.

A plausible account about the ungrammaticality of (6b) is that one might have some problem when processing the sentence. For example, *consider* can be subcategorized into a *that*-clause.

(40) I consider that Mary is to blame.

When a sentence is processed, once the *that*-clause after the verb is processed as an object, then it might be difficult to process that as the subject of a small clause in ECM constructions. When *pro* is replaced with *it*, the sequence of *it* and a *that*-clause makes a heavy constituent. Therefore, the version in which the *that*-clause is extraposed is preferred as in (39).

4. Conclusion

In this paper, we investigated the distribution of CPs. CPs appear in Case-assigned positions in some cases, and in non-Case-assigned positions in the other cases. But it has been unclear in the literature how Case is assigned to the CP which is in a Case-assigned position. In the Minimalist Program, features trigger syntactic operations. Case is assumed to be a feature and it plays a significant role in building a structure. It is implausible to suppose that CPs have Case features in some cases, but not in the other cases depending on where they appear. If *that*-clauses in Case-assigned positions are actually a part of DPs, DPs become the only arguments which have Case features, and it makes the grammar simpler. Specifically, we proposed that a CP should be a complement of D which is a silent pronoun *pro* when the CP is in a Case-assigned position, and that *pro* and its complement CP is in an appositive relation. Once we assume that, it follows that the apparently same *that*-clauses have quite different structures depending on where they are generated.

Notes

This paper is based on the presentation at the 24th conference of Konan English Literature Society (June 28, 2008 at Konan university). I am most grateful to the audience at the conference for comments. All remaining errors and inadequacies are mine.

1 This is captured formally in Chomsky (1980).

2 The example is from Kim (2005)

3 We assume that some problem about processing will compel the *that*-clause to move to the sentential final position.

4 When the DP including *pro* is in the subject position as in (16b), it is banned to extrapose the *that*-clause as well, since the EPP demands that some element with a phonetic form be in the subject position.

5 See Stepanov (2001) about how the extraction out of the adjoined position is blocked in the recent framework of the Minimalist Program.

References

- Chomsky, N. (1980) "On Binding," *Linguistic Inquiry* 11, 1-46.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, New York: Praeger.
- Chomsky, N. and H. Lasnik (1993) "The Theory of Principles and Parameters," in *The Minimalist Program*, 13-127, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," in *The Minimalist Program*, 167-217, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1995) "Categories and Transformations," in *The Minimalist Program*, 219-394, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (2000) "Minimalist Inquiries: the Framework," in D. Michaels, R. Martin and J. Uriagereka (eds.) *Step by step: essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-155, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Emonds, J. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*, New York: Academic Press.
- Kim, J. (2005) "Subject and Object Extraposition in English: Corpus Findings and A Constraint-Based Approach," *Studies in Generative Grammar* 15, 145-164.
- Kim, J. and I. Sag (2005) "English Object Extraposition: A Constraint-Based Approach," *Proceedings of the HPSG05 Conference*, CSLI Publications.
- Postal, P. and G. Pullum (1988) "Expletive Noun Phrases in Subcategorized Positions," *Linguistic Inquiry* 19, 635-670.
- Rosenbaum, P. S. (1967) *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral Dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Stepanov, A. (2001) "Late Adjunction and Minimalist Phrase Structure," *Syntax* 4, 94-125.

甲南英文学会規約

- 第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。
- 第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を計ることをその目的とする。
- 第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。
1. 研究発表会および講演会
 2. 機関誌『甲南英文学』の発行
 3. 役員会が必要としたその他の事業
- 第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する。
1. 一般会員
 - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
 - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
 - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
 2. 名誉会員 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻、英語英米文学専攻）を担当して、退職した者
 3. 賛助会員
- 第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員若干名、会計2名、会計監査2名、大会準備委員長1名、編集委員長1名、幹事2名。
2. 役員任期は、それぞれ2年とし、重任は妨げない。
 3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 4. 評議員は、第4条第1項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
 5. 会計、会計監査、大会準備委員長、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
 7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
 8. 評議員は、会員の意志を代表する。

9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 大会準備委員長は、大会準備委員会を代表する。
12. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
13. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員については年間5,000円、学生会員については2,000円とする。

第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 大会準備委員会 第3条第1項に定められた事業を企画し実施する。

2. 大会準備委員は、大会準備委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は3名とする。

第10条 編集委員会 第3条第2項に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学各2名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第11条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。

この規約は、昭和62年5月31日に改訂。

この規約は、平成7年7月1日に改訂。

この規約は、平成11年6月26日に改訂。

この規約は、平成13年6月23日に改訂。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は3部（コピー可）をフロッピーディスクと共に提出し、和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスはA4判タイプ用紙 65 ストローク×15 行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
 - イ. 和文：ワードプロセッサ（40 字×20 行）で A4 判 15 枚程度
 - ロ. 英文：ワードプロセッサ（65 ストローク×25 行、ダブルスペース）で A4 判 20 枚程度
4. 書式上の注意
 - イ. 注は原稿の末尾に付ける。
 - ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
 - ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の箇所原語名を書くことを原則とする。
 - ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook*, 6th ed. (New York: MLA, 2003) 『*MLA 英語論文の手引き*』第6版、北星堂、2005年)に、英語学の場合 *Linguistic Inquiry style sheet* (*Linguistic Inquiry* vol. 24) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は11月30日とする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を A4 判 400 字詰め原稿用紙 3 枚（英文の場合は、A4 判タイプ用紙ダブルスペースで 2 枚）程度にまとめて、3 部（コピー可）をフロッピーディスクと共に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割りふりは、大会準備委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、一人 30 分以内（質疑応答は 10 分）とする。

ISSN 1883-9924

甲 南 英 文 学

No. 24

平成 21 年 6 月 20 日 印刷

— 非 売 品 —

平成 21 年 6 月 27 日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 文 学 会

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

甲南大学文学部英語英米文学科気付
